

41690

教科書文庫

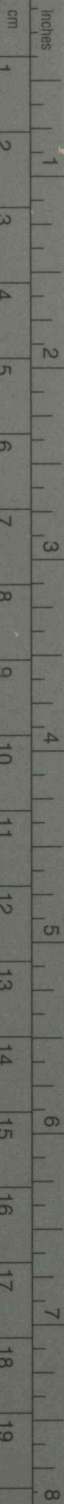
4
810
41-1941
200030 1605

# Kodak Gray Scale



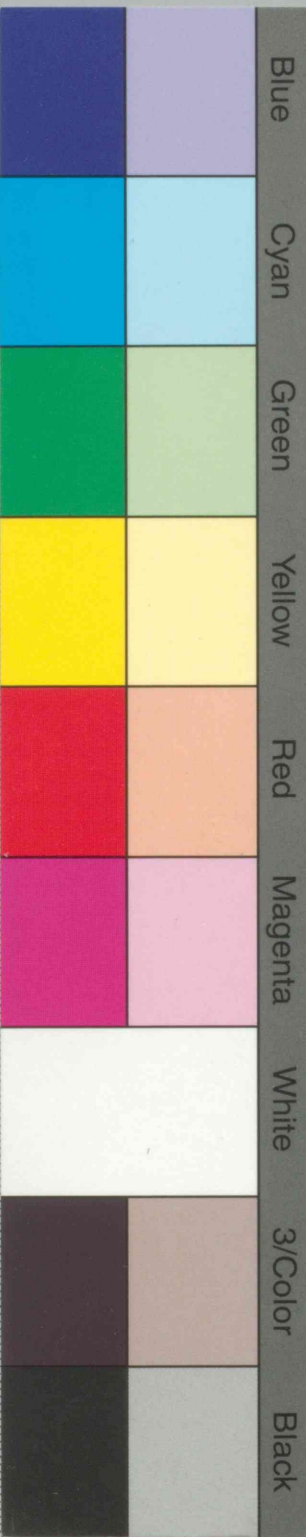
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



紙山園語讀本

改訂版

卷六

教  
4  
200





濟定檢省部文

用科文漢語國校學中 日一十月九年六十和昭

教科書文庫  
4  
810  
41-1941  
2000301605

資料室

378.9  
I91

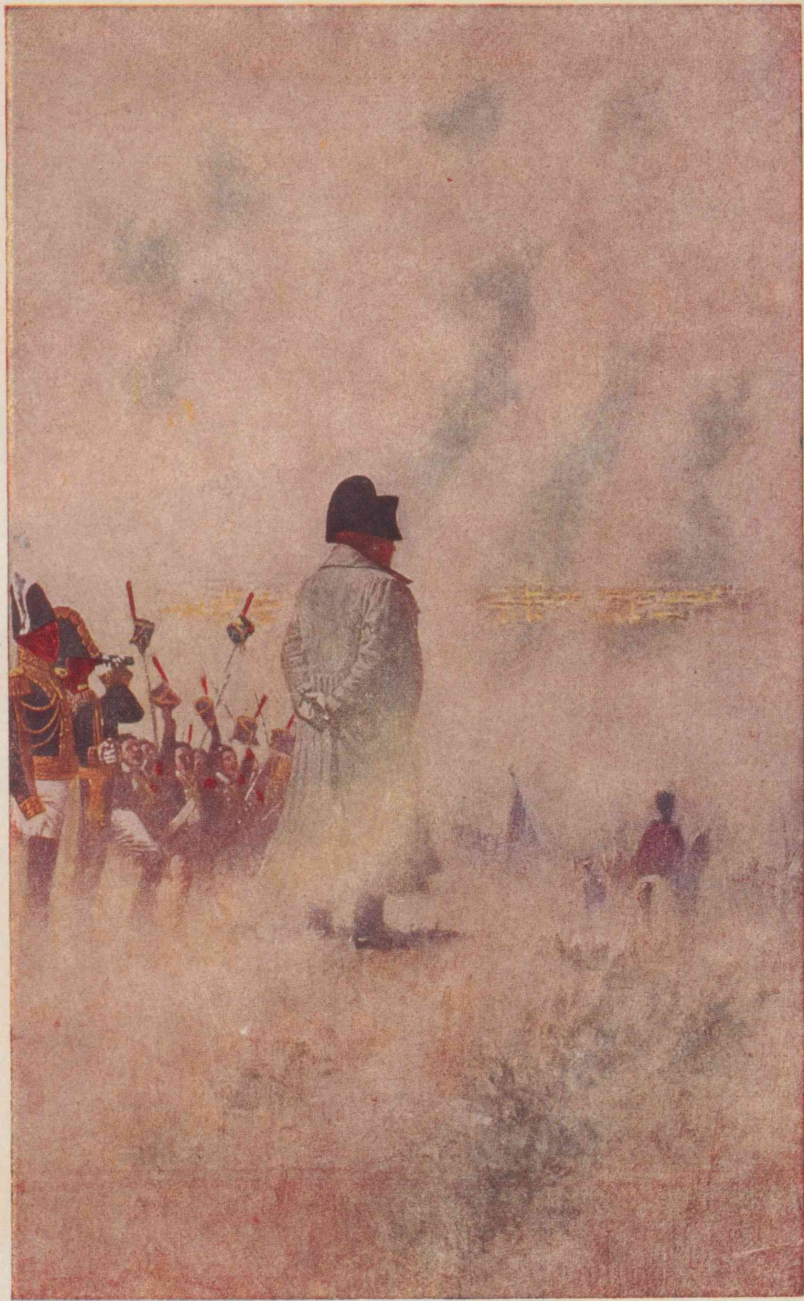
文學部  
力編  
紙山國語讀本

広島大学図書

2000301605







運命の丘 (泰西名畫)





## 卷六 目次

- 一 御大禮の御發軔を送り奉る……………一
- 二 國民性の核心明、淨、直 その一……………九
- 三 國民性の核心明、淨、直 その二……………三
- 四 伊藤公を誅ぶ……………井 上 馨……………一九
- 五 星座の趣味……………山 本 一 清(據)……………三
- 六 傷をなめる獅子……………高村光太郎……………三
- 七 運命の丘 その一……………島 村 抱 月……………三



八 運命の丘 その二……………島村抱月……………四  
 九 つれづれなるまゝに……………卜部兼好……………五  
 一〇 趣味の巖島…………………………六  
 一一 童心童眼……………吉田絃二郎……………六  
 一二 東山より不破關まで……………(東關紀行)……………七  
 一三 秋と冬……………諸家……………八  
 一四 國際に用ゐられた茶の湯…………………………八  
 一五 柔術……………小泉八雲……………九  
 一六 木曾殿の最期……………(平家物語)……………九  
 一七 我が手紙觀…………………………一〇

一八 九十九里濱……………伊藤左千夫……………一〇  
 一九 大佛殿の柱くゞり……………十返舎一九……………一〇  
 二〇 繪の山水……………橘千蔭……………一〇  
 二一 音に聞こゆる爲朝……………(保元物語)……………一〇  
 二二 野州の山と越の海……………尾崎紅葉(據)……………一〇  
 二三 狂歌八首…………………………一〇  
 二四 世界の行末 その一……………横山又次郎(據)……………一〇  
 二五 世界の行末 その二……………横山又次郎(據)……………一〇  
 二六 アイヌ民族の純情……………金田一京助(據)……………一〇  
 二七 千曲川旅情の歌……………島崎藤村……………一〇



二八 玉かつま抄……………本居宣長……………二四

二九 本居翁の遺蹟……………芳賀矢一……………二七

三〇 國民の覺悟……………大西 祝……………二九



# 純正國語讀本 卷六

## 一 御大禮の御發朝を送り奉る

昭和三年十一月六日の午前七時である。

宮城前の廣場に充ち満ちた夥しい奉送者は、水を打つたやうに静まり返つてゐる。

この沈黙の天地を破つて、忽ち君が代の喇叭が響いて來た。最大歡喜の興奮に身内の打ち顛ふのを感じながら、首をさし伸べて鹵簿の出現を待つて居ると、やがて靴の蹄、車の輪の盛砂を嚙む音が耳に冴えて、朝日にきらめく先驅の三十餘騎が現はれた。つづいて和鞍に跨つた王朝衣冠の數人が現はれた。やがて賢所を

水を打つたやうに静まり返る。

靴の、蹄の、車の輪の、盛砂を嚙む音が耳に冴える。

一 御大禮の御發朝を送り奉る

平安時代五ノ五ノ五

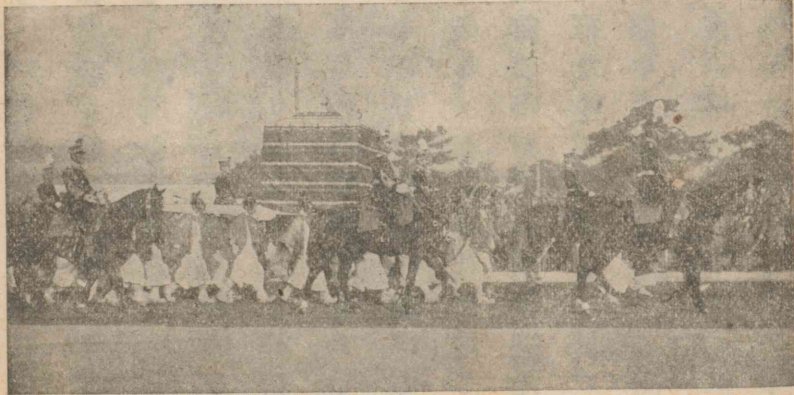


鳳輦  
陛下の御羽車を  
いふ。

無数の臣子の忠  
愛の一念に包ま  
れ。  
人も神も山も川  
も魂を千々に碎  
いてゐる千年の  
歴史の京都。

奉安した赤地の錦の御羽車が、黄色の布衣に白い袴を着け、藁沓を穿いた十六名の八瀬の童子に舁かれて、光のやうに神々しく現はれさせられた。やがて天皇旗を先立て、騎馬の將校六人に前後を護らせて、六頭立の鳳輦の尊い影が、嚴かに現はれさせられた。つづいて同じく六騎の將校に護られた四頭立の皇后宮の御料車が美しく現はれさせられた。鳳輦と御料車とのほかに供奉したる儀装の馬車が十七臺、鹵簿の長さが五町半。かくて此の大鹵簿は、二重橋の袂から東京驛の驛頭に至るまで、路の兩側を埋め盡くした無数の臣子の忠愛の一念に包まれ、鳳輦の御通過につれ、堵列した各隊の順次に吹奏する君が代の喇叭に送られて、肅々と東京驛に着かせられた。そしてやがて御大禮の奉仕に、人も神も山も川も、魂を千々に碎いてゐる千年の歴史の京都に赴かせられた。

これは今上陛下が御即位の大禮を行はせらるゝ爲め、京都に御幸されました御鹿島立の模様の略記である。吾々は其の朝、二重橋に眞向ひの芝生の上に立つて奉送した。吾々は朝の二時に、或る處に集まつて、三時前に其處に着いた。雨催ひの熱苦しい夜であつたが、空はやがて拭ふが如くに晴れ渡つた。やがて四時となつた。四時は兩陛下御起床の時刻だといふ事である。同時に賢所移御の御式の始まる時刻だといふ事である。もう、掌典長等が鞠躬如として、賢所の大御前に神饌を供へて居ることであ



御 羽 車



今こそ、五町有餘の長い大鹵簿が肅々として動き始める時刻である。

らう。もう掌典長の祝詞が告り始められたであらう。もう十一人の樂官が、貴き御灯の光を浴びつゝ、神樂歌を奏し始めたであらう。御出門の時刻もやがてである。もう、賢所を御羽車に移し参らせたであらう。同時に天皇陛下も后、宮も、庭上下御の御儀として、御内庭の地上に降り立たせられたであらう。もう、御旅立の賢所に御挨拶の御拜があつたであらう。もう、御車寄に出でまして、鳳輦に乗御あらせられたであらう。今こそ、五町有餘の長い大鹵簿が肅々として、動き始める時刻である。など、時計を見ては、固唾を呑みつゝ、待ち設けて居ると、正七時の時を違へず、嘯唳たる「君が代」の喇叭の第一聲が、嚴かに響いて來たのであつた。

この曉の自然の麗はしき、神々しさは、言語に絶してゐた。秋の夜の高き空が、いつしか霞み始めて、六日の有明月が大内山の樹立

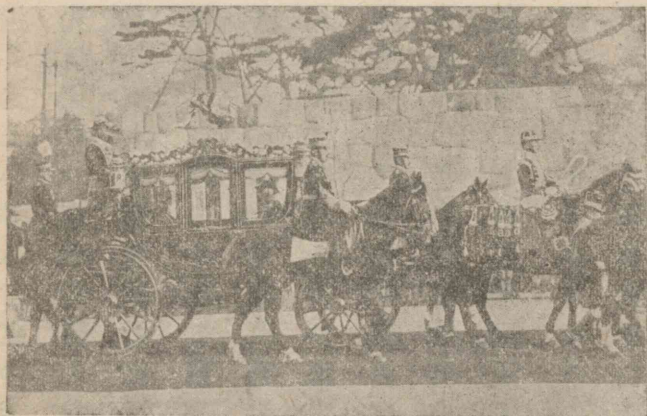
空線を破つて其の巨大な姿を眞黒に浮かし出す。

近くさしかゝると、東の空が次第々に白んで來る。同時に馬場先、日比谷の向うに聳え立つてゐる鐵筋の大建物が、空線を破つて其の巨大な姿を眞黒に浮かし出す。その中の最も巨大なる數者は、刻々に明るくなる東雲の空を背景にして、小旗を吊した綱の賑やかに張りわたされた屋頂の凸凹を、滿艦飾の軍艦のやうに、鮮かに見せて來る。やがて、あちこちのぼんやりした奉祝塔が、はつきりと見えて來る。黑白、明暗の二色にのみ見えてゐた世界が、無数の美しい色彩を見せて來る。其の中に、夥しい兵士が拔劍した將校に率ゐられて、規則正しい足並で陸續と繰り込んで來る。「氣ヲツケ！」「右ヘナラヘ！」の號令が、方々から起こつて、カアキイの勇士が行幸道路を挟んで整然と堵列する。やがて長い四列の生堵が出来あがる。四列の陰には、憲兵が數尺おきに一人づつ、正しき距離を取つて、後ろ向きに立ち並んだ。其の陰には、更に警官



金衣羽帽の大官等が、服装に冠帽にそれ／＼所屬の誇りを見せた。

が二三間おきに一人づつ、これも後ろ向きに立ち並んだ。奉送者を監視するためであらう。その中に金衣羽帽の大官等が、服装に、



冠帽に、それ／＼所屬の誇りを見せて、二重橋の石橋のすぐ前の廣場の兩側に所狭く立ち並んだ。たとへば春の花と、秋の薄と、金銀七寶の人工美術とを一つに集めたかのやうである。かくして文武の諸大官を始めとして、塔列の各軍隊や、學生や、在郷軍人や、青年團や、諸官公署及び各種の社會事業團體等の奉送者が、悉く其の在るべきところに落ちついた。最後に盛砂が敷き均されて、織塵を

もつけぬ一筋の黒い路が目も遙かにつゞく。

朝日はあかくと輝き出でて、曠古の盛儀の一切の準備の出来上がった瞬間を照らしてゐる。

草も、木も、空も、土も、悉く奉送の眞心の一つにして、億衆の眼は、一齊に大内山、二重橋に向ふ。この時である、嘸曉たる君が代の喇叭の第一聲が、曉の沈黙を破つたのは。

この時である、嘸曉たる「君が代」の喇叭の第一聲が、曉の沈黙を破つたのは。

昭和三年十一月六日の朝に於ける大行幸の御發軔は、實に言語に絶した、美しい、嚴かな、そして神々しい御門出であつた。御即位の大禮を行はせられんが爲め、皇祖の御靈の御羽車に陪し、劔璽を奉じて、千年の舊都にむかはせらるゝ大行幸の御門出である。太田道灌以來數百年間の武將等が、武家文化の粹を集大成してさゝげ奉つた大千代田城を出でさせられ、王朝の衣冠、現代の禮装、其の



御慈みの御會釋  
を絶えず大御寶  
に賜はつての御  
門出である。

他の歴史美を麗はしく兼ね備へた大調和の大鹵簿を率ゐさせられての御門出である。舊きを紹ぎて新しきを大成すべく、祖宗に誓ひ、臣民に宣らせ給はんが爲めの御門出である。宮城より東京停車場に至るまで、畏くも、絶えず御慈みの御會釋を奉送の大御寶に賜はつての御門出である。天高く氣清き瑞光の秋の曉に、天の地の、人衆の、映えに映え、榮えに榮えて、聖天子の大行幸を送り奉り壽ぎ奉る御門出である。吾等は今日の御發軔の盛儀を拜して、そぞろに、天智天皇の御宴に侍して、大友皇子の奉られた五絶の御詠を思ひ出だした。

皇明光日月、帝徳載天地、

三才並泰昌、萬國表臣儀、

恭しく惟るに、皇恩の洽く、國威の盛んに、而して、天地、人、三才の泰昌なること、千古未だ今日の如きはない。吾々は今日の盛儀を仰

ぐにつけても、切に、此の聖代に生を享けた事の幸福を感じるのである。

## 二 國民性の核心明、淨、直 その一

文武天皇

第四十二代

文武天皇が即位の際に下された宣命の中に、

明き淨き直き誠の心もちて、いやす、みく、て、緩怠ることなく、務め結りて仕へまつれ。

といふ詞がある。

吾等は此の宣命に在る「明き」「淨き」「直き」心といふのが、日本人の性質中の核となり、中心となるものであらうと思ふ。此の語は代々の詔勅に幾度も幾度も繰返されて居る、しかも重きを措いて繰返されて居る。其の他、古事記『日本紀』萬葉集等に於いて、重々しい場

明淨直の三つが  
日本人の性質中  
の中心である。

古事記

三卷、我が國開



開より推古天皇  
までの歴史

日本紀

日本書紀ともい  
ふ。三十卷、神  
代から持統天皇  
までの歴史

萬葉集

奈良朝時代の歌  
を集めたもの、  
歌の数四千四百  
九十六首

合に幾たびも用ゐられて居る。これは畢竟、吾等の祖先が心の中  
に深く感じた事、大和民族に最も濃厚に最も多量に賦與された性  
質が、自然に口を衝いて屢々發したのではないか。世に大和民族の  
特性と稱せらるゝ現實、光明、活動、向上、中庸、快活、忠孝、清廉、勇武、義俠、  
風雅等の諸性質は、概ね此の明、淨、直の三大性を基本として説明さ  
れるらしく、殊には、三種の神器が此の三大性の標章として遺憾な  
きやうに思はれる。抽象的ではあるが、左に一通り其の理由を説  
明して見たいと思ふ。

鏡の性は「明」で、其の徳は玲瓏透徹に物を映すにある。日本人は  
鏡のやうな明るい心を以て正しく事物を觀た。故にその見方は  
概して公平無私で、赤い物は赤いとし、黒い物は黒いとし、善行に對  
しては我れを忘れて歎美し、悪行を見ては敢然として排斥すると  
いふ傾きがあつた。天照大御神は鏡を齋きて我が大御前を見る

毛色が變はつて  
居る。

喧嘩。  
騎虎の勢の意地

まづ儒教が入つ  
て來た。至つて

が如くせよと仰せられた。全國無數の神社には、その鏡が神體と  
して齋かれてある。詔勅や祝詞や君臣應對の詞などに、明き心と  
いふ語が繰返し用ゐられて居る。是等はいづれも、此の性質が我  
が國民の心底に根深く植ゑつけられた證據であると考へる。我  
が國民の中庸性、折衷性、調和性も、一面此の根本性質の結果であら  
う。我が國には政治、社會、宗教等の諸方面に互つて、諸外國に見る  
が如き非常な大衝突が無い。無いではないが割合に少なく、又い  
つも大抵の所で折合つて調和するといふ傾きがある。例へば、異  
主義が新に外國から入つて來る。毛色が變はつて居るので、暫ら  
くは争ふが、やがて双方に道理も無理もあることが解つて來ると、  
愚かしい争論が續けられなくなる。そこで騎虎の勢の意地、喧嘩  
は止めにして、長短取捨の調停をする。萬事此の通りである。ま  
づ儒教が入つて來た。至つて尤もらしい事をいふので、早速備ひ



尤もらしい事をいふので、早速備ひ入れて、我が固有の倫常に理窟をつけて貰ふ。かくして儒教は長へに我が國風の忠實なる辯護者となつた。

國家人民の  
上杉鷹山の一讓  
封之詞しの中に  
ある。

入れて、我が固有の倫常に理窟をつけて貰ふ。かくして儒教は長へに我が國風の忠實なる辯護者となつた。佛教が入つて來た。餘りに奇怪なので、暫らくの間押問答がある。やがてその説き方の巧妙なのに打ち込むと、何等の芥蒂なく中心から歸依してしまふ。至尊の御身を以て自ら三寶の奴と名乗らせらるゝやうになる。けれども天位の妖僧に歸するを見ては、さすがに黙つては居らぬ。かくして遂に兩部習合といふ利巧な調和案が成り立つた。基督教も幾度かの争ひが濟んでもうそろ／＼日本ものに成りかけて來て居る。あの位の騒ぎで明治の維新を見たのも、平和の裡に憲法を得たのも、君臣父子の親和も、萬世一系の國體も、一面皆「明」といふ基本的國民性の賜ではないか。馬上に天下を得た武將が文藝の奨勵に骨を折るのも、封建專制の君主が國家人民の爲めに立てたる君にて、君の爲めに立てたる國家人民にあらず。などいふ

古今集云々  
敵ぞとて

共に新納武藏守  
忠元の事

事を見ること明らか、理に従ふこと流るゝが如き根本性。

十字軍

聖地恢復の戦争

(一〇九六—一二九一)

フランス革命

(一七八九—一七九二)

のも、群雄割據の亂世に、陣中篝火の下で古今集を讀む武將のあるのも、同じ戰國に、敵ぞとて何かは人のにくからむ同じ御國の同じ身なれば」と詠んで敵を同胞として愛した勇將のあるのも、武士が僧侶に親しみ、僧侶が武士に盡くすのも、乃至さつぱりと腹を切るのも、皆一つは事を見ること明らかに、理に従ふこと流るゝが如き根本性によるのではないか。大和民族は十字軍や佛蘭西革命の如き極端な芝居を演ずるには、餘りに心が明る過ぎる傾きがある。吾等は、日本人を「公正」といひ、理に鋭し」といひ、感情の平靜を保つ」といひ、何事をも受け入るゝ胸懷洞然たる人種なり。」と言つた外人の批評が、決して出鱈目の空世辭ではないと思ふ。

### 三 國民性の核心明、淨、直 その二



鏡は空白にして正しく物を映すれば足るが、玉は必ずしも空白物を映すことを要せずして、温潤の光、圓融の相、澄徹の趣のあることを要する。

清淨の徳は玉に於いて絶好の標章を見出だして居る。淨と明とは、似ては居るが、同じくはない。而して其の異なる趣は、丁度鏡と玉との異なる趣に似て居る。汚穢混濁を忌むことは清明、共に同様であるが、清はそれ以上に味はひがあり、温かみがある事を要する。譬へば、鏡は空白にして正しく物を映すれば足るが、玉は必ずしも空白物を映すことを要せずして、温潤の光、圓融の相、澄徹の趣のあることを要するが如きものである。本來日本人は明らかに事物を見る長所があるのみならず、外物を見るにも、自分を發表するにも、一種の味はひある態度を具へて居た。其の明は空白の明ではなくして、温潤、圓融、澄徹の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくして、水晶、夜光珠の明である。我が國には古來、禊祓が多く行はれ、廣く用ゐられ、且つ重要視されて居た。祝詞、宣命を初めとして多くの歌詠諷謠は、明き心を現はしながら同時に趣味風

韻に富んで居た。しかも其の趣味や形容は、諸外國例へば支那の文學に見るが如き誇張の弊がなくして、よく其の實を現はし、中味に相應はしい修飾を纏うて居た。むくつけき武人にも戦陣の間に花を翳し、歌詠を贈答し、或は兜に香を焼きしめるといふやうな嗜みがあつた。上流社會はいふに及ばず、市井の民に至るまで、それぞれ相應はしい文學を有つて居る。外國出稼ぎの労働者が其の日の生活に窮しながらも、猶ほ一二の植木鉢を持たぬはなく、而して是れは外國の労働者には絶えて見ぬ所だといはれて居る。大工や指物屋の手に成るはかなき家具や細工物も、西洋のが表面のみ美しく裏面の粗末なのに反し、我が國のは見えぬ裏面まで手を盡くすといふ嗜みがあるといはれる。是等は孰れも大和民族が清きを愛する根本性の現はれたものではないか。吾等は、日本人は世界第一の審美眼を有する國民にして、貴族より労働者に至



直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味する。

るまで皆美術を愛翫す。と言つた一外人の批評が必ずしも虚妄てはないと信ずる。

直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味する。其の厭ふ所は、躊躇、緩慢、首鼠兩端である。曲ること、拗ること、邪なることである。叢雲の劍は其の標章として此の上なく相應はしい。元來直の徳の本領は心の明らかに見た所に向つて直前するにある。若し右の三徳を一括して之れを一體と見れば、明は其の靜的方面即ち知の方面で、直は活動方面即ち意の方面である。知の明らかに見たる所をば、意が直前して實現する、而して知の見方の働き方に潔くして言ひ知らぬ味はひのあるのが、邦人固有の性格ともいふべきであらう。明き心を以て、父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし愛し、故にその明き心の示す所に従ひ、直前して父母に事へ妻子を愛しむ。君を仰げば、八隅知し大君現つ神として

父母を見れば云云  
萬葉集、山上憶良の歌

海行かば云々  
萬葉集

其の君父に事へ妻子を愛するや、多くは水臭い思慮分別、利害勘定の結果ではなくして、直實掬すべき趣があつた。

國に臨み給ふさまが限りなく高く貴い、故に直前して、海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍の獻身的奉公を効す。此の通りである。而して其の君父に事へ妻子を愛するや、多くは水臭い思慮分別、利害勘定の結果ではなくして、直實掬すべき趣があつた。此處が眞淵、宣長等の國學者が感歎し自負して措かなかつた所である。無論何處の國にも文化の進まぬ時代には、かやうな自然的の所があつたであらう、また日本民族にも利害勘定の行爲が無かつたとはいはれぬであらう、又自然直實の行爲に弊害が伴はぬともいはれぬであらう。けれども我が民族の特長の一面は、とにかく此處に在つたやうに思はれる。其の例は、遠い昔では須佐之男命である。勝ちすさんでは前後を顧みず高天の原を震動される、罪せらるれば命を畏みておとなしく邊土に行かれる、出雲では櫛名田姫の不幸を見て、危険をも顧みず直ぐに八俣の大蛇を退治される、實



劍を得ると、之れを先きに敵なうた天照大御神に上られる。行り方がいかにもきびくして直斷決の文字そのまゝのやうではないか。次いで倭武尊それから降つては、鎮西八郎爲朝が腕白、勘當、九國押領、京師召還、保元勇戦、大島配流の一生、是れも須佐之男系の大立者で、是等はいづれも向う見ずの亂暴者でありながら、不思議に情に厚い所があり、君父の事とあれば水火も辭せず、直前するといふ風がある。直斷決、勇の權化で、たしかに大和民族固有性の一面を脊負つて立つヒーローである。其の他蒙古の來寇に西海の將士が身命を棄て、防戦した態度を見よ。代々の武士が千萬の軍なりとも言擧げせず取りて來ぬべき斷乎たる覺悟を見よ。畠山重忠、加藤清正の如き、竹を割つたやうに正直な豪傑が國民に尊崇さるゝを見よ。曾我の五郎、朝比奈三郎の如き一徹者の國民に愛さるゝを見よ。豁然大悟の禪宗が盛んに行はれたるを見よ。

千萬の云々  
高橋蟲磨の歌  
萬葉集  
畠山重忠  
源頼朝の臣  
曾我五郎  
名は時致  
朝比奈三郎  
名は義秀  
和田義盛の子

分別も久しく  
云々  
山本常朝の『葉隠』にあり。

おツと出せば、ヤツと受ける金平淨瑠璃の流行したる趣を見よ。眞偽は知らず、正直は一旦の依怙に非ずと雖も終に日月のあはれみを蒙る、謀計は眼前の利潤たりと雖も必ず神明の罰にあたる。といふ戒が、天照大御神の御言として神道家に唱へられて居た。武士は七息思案といふ諺があつて、分別も久しくすればねまる、武士は物事手取早にするものぞといふ事が、武士道の金戒になつて居た。是等はいづれも直きを好む性質が大和民族の心性の基本精髓を成して居る證據である。

『新國文學史』

#### 四 伊藤公を誅ぶ

井 上 馨

明治四十二年十月二十六日、我が友樞密院議長伊藤博文公、韓國兇徒の狙撃するところとなり、暴かに清國吉林省哈爾賓驛に薨ず。

伊藤公  
明治の元勳  
名は博文  
長州の人  
明治四十二年薨  
年六十九  
狙撃するところ  
となる。



予君と交る五十餘年、異體同心生死患難をともにし、國歩艱難の秋に始まり、太平富貴の日に至り、始終渝はること莫く、金石も雷ならず。

交友の誼、今古に愧づるなし。

文久癸亥の仲夏  
文久三年五月十二日、二人ロン  
ドンに潜航す。

馬關の攘夷

文久三年五月から八月に亘つて、長州藩が、佛米英蘭の四國の軍艦と馬關で戦つた。



侯爵 井上馨

回顧すれば四十七年前文久癸亥の仲夏、君予と偕に發憤、海軍の術を學ばんと欲し、禁を犯し、潜かに泰西に航し、居る事僅かに半年餘、馬關、鹿兒島の攘夷を聞き意を決して急に歸り、首として開國を

嗚呼、哀しい哉。予何ぞ多言するに忍びん。然りと雖も、予君と交はる五十餘年、異體同心、生死患難をともにし、國歩艱難の秋に始まり、太平富貴の日に至り、始終渝はること莫く、金石も雷ならず。自ら謂ふ、交友の誼、今古に愧づるなしと。予遂に復一言せずして止むべからず。予君に長ずること六年、君予の垂死を哭すること二回。予幸に君の交情看護に因つて、再生するを得たり。料らざりき、今日反つて君の葬を送らんとは。嗚呼、哀しい哉。

鹿兒島の攘夷

文久三年六月英艦鹿兒島を襲ふ。九月靖和。

高杉

名は晉作、長州藩士、慶應三年歿、年五十九

木戸

名は孝允、長州藩士、明治十一年歿、年四十七

大久保

名は利通、薩州藩士、明治十一年歿、年四十七

維新の績これよりして破竹の如し。

王臣匪躬

王臣、塞々、匪躬之故。(易經)

唱へ、故國を危難より脱せしむ。内訌尋いで起こり、予は暗夜要撃に遭ひて殆んど死し、君は高杉を助けて兵を擧げ、藩論を恢復し、我が一大危難を轉過せり。已にして王政復古、乃ち徴士に擧げられ、版籍奉還の際、木戸、大久保二公を佐けて最も力あり、維新の績これよりして破竹の如し。進取の宏謨を翼賛し、維新の大業を成就す。勅を奉じて憲法を創定し、永く國家の本を固くし、その他法律制度の設、概ね君に俟たざる莫く、洵に組織の才を推す。四度總理大臣となり、勲業の盛を極め、首めに韓國統監となりて、保護の範を立つ。君、學漢洋を兼ね、識東西に通ず。最も東洋の平和を以て念とし、常に忠節道義を以て淬礪し、王臣匪躬を以て自ら任ず。故に國民は仰いで文治の宗と爲し、外人は視て平和の表と爲す。留韓四年、歸來未だ曾て寧處せず。年七十に垂んとして、一歳の行萬里を期し、節冬寒に向ひ、北滿の野に見學す。忠君報國の厚きに非ずんば、



忠節、道義を以て淬礪し、玉臣匪躬を以て自ら任す。

國民は仰いで文治の宗と爲し、外人は視て平和の表と爲す。

環球着望の盛、振古未だ君の如きに比するあらざるなり。

匪以報公云々

蘇轍の「代三  
省」祭司馬丞相文」中に在る。



公 伊 藤 博文

誰れか能く此くの如くならん。豈意はんや、君の忠節にしてこの不測に遭ひ、暴かに異邦の地に薨ぜんとは。嗚呼、哀しい哉。君の訃電聞す。皇上震悼、勅して國葬を行はしめ、白叟黃童、織婦耕夫も哀悼せざる莫く、乃ち外國帝王、大統領、大臣、紳士に至るまで親しく弔電を發し、我が不幸を言はざる莫く、内外新聞争うて君の才徳、勳業を稱讚し、環球着望の盛、振古未だ君の如きに比するあらざるなり。抑、予は又これに因りて我が國民に望むことあり。誠に君の死を哀しまば、則ち宜しく舉國一致、盡忠報國、東洋の平和を維持するに努め、以て君の志を紹ぐべし。古人いふ「匪以報公、維以報

井上馨

明治の元勳  
長州の人  
大正四年薨  
年八十一

トレミー

西紀二世紀のア  
レキサンドリア  
の天文學者、數  
學者、地理學者

星座とは最寄の  
星々を結び付け  
て、意味のある  
形を成した一座  
と見ることであ  
る。

國。死者復生。信我此言。と、庶幾はくは君をして瞑せしむるを得ん。嗚呼、哀しい哉。老友 侯爵 井上 馨

### 五 星座の趣味

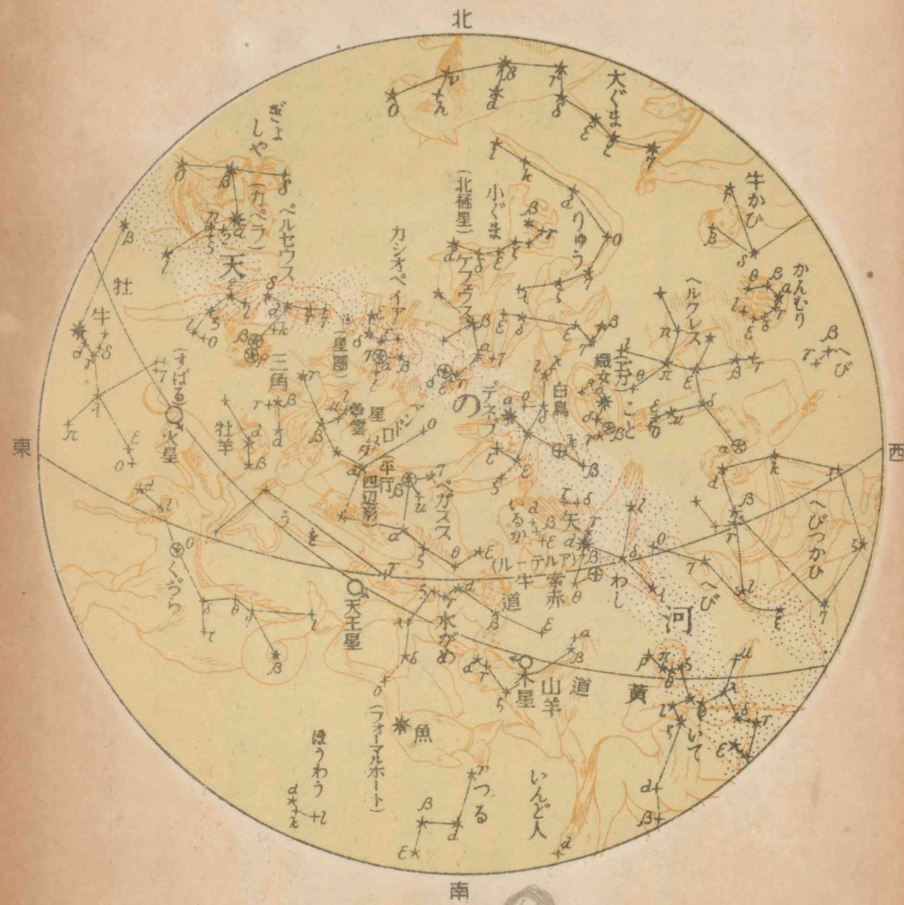
星座の觀念ははやくバビロニヤ人の思ひついたもので、黃道十二宮の區分の如きは、實に紀元前五千年にも遡る古いものであるが、ギリシヤ人が之れを補足し、完成して、紀元第二世紀には、トレミーの四十八座が悉く揃ふやうになつた。星座とは最寄の星々を結び付けて、意味のある形を成した一座と見ることである。この所屬の星々を都合よく結びつけては、其の名に因んだ趣味のある畫圖が、あの廣大な天空のあちこちに、一つづつ畫かれて居ると考へるのが、昔の天文學者の慣例であつた。



琴の星座  
鷺の星座  
ヘルクレス星座

星といふものは、昔も今も單なる物理學的光源とのみは見られないのが普通で、必ず一種の神秘的な、崇高な、或はロマンチックな感興を伴ふものである。

例へば琴の星座は一面の七絃琴、鷺の星座は鷺が翼をひろげて飛んでゐる形、ヘルクレスは、一人の英雄が右手に棍棒を持ち、左手に月桂樹の枝を持つて片足跪いた姿といったやうに、さういふ畫圖が大空に畫かれてゐるものと美しく考へてゐたのである。無論今日の純理學的な頭で見れば、かういふ想像は學術上の根據の全く無いものであるが、天文といふものには昔から理窟だけでは通らぬ所があつた。殊に星といふものは、昔も今も單なる物理學的光源とのみは見られないのが普通で、之れを見るだけでも、必ず一種の神秘的な、崇高な、或はロマンチックな感興を伴ふものであるが、尙ほ其の上に此の星々の運行を知る様になると、更に天界の整然たる秩序と雄大なる計畫とに打たれ、宇宙の根原に直接した様な心持になつて、それが或ひは神話となり、或ひは宗教と結びつき、段々一つ一つの星の並び方に對して不思議な想像が加へられる



星の図



星座の見方

これは九月十月の星座で、九月一日ならば午後十一時頃、同十六日ならば午後十時頃、十月一日ならば午後九時頃、同十六日ならば午後八時頃の空に現はれる星とその星座である。

見方は圖を頭上にかざし、方角通りに置き、普通の地圖の様に下に置いて見ると、南北が反対になる。下から仰いで見ると、それが空全體の縮圖となるので、圖の中心が頭の眞上、圓のまはりが地平線となるわけである。

星は四等星まで書いてある。★は一等星、☆は二等星、◆は三等星、◇は四等星である。

○の中に入れたのは變光星と云つて、時々光が強くなつたり、弱くなつたりする星である。一等星の主なるものには名を付けてある。( )の中に入つてゐるのがそれである。晝間太陽の通る道を黃道と云ふが、惑星が又黃道を通過する。この頃は火星、天王星、木星などの惑星が通るが、天王星は遠いため殆んど目に付かない。木星が一番光が強く、どうかすると電燈かと思はれる程である。すべて惑星は高く登つた時は、他の星のやうに瞬きをしないからすぐわかる。今の空で一番わかりやすい星座はベガス(平行四邊形をなしてゐるのですぐわかる)白鳥、アンδροメダ、カシオペアである。勿論北斗七星(大熊)とその周囲のいろ／＼の星座も見える。星に付けた $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 等の希臘文字は、所屬星座に於けるその星の順位を示すもので、 $\alpha$ が一番大きく、 $\beta$ と順次に小さくなる。星の等級には關係がない。ある星座では一等でも $\beta$ のことがあり、ある星座では、二等星三等星が $\alpha$ の位置を占めてゐることもある。

カシオペア星座

大熊星座

やうになつて、遂に人の姿や獸の形を表はすと考へらるゝまでに發展したのであらう。人に感情生活の一面が存する限り、こゝまで來るのが自然で、星座の由來は實に意味の深いものである。

天界に於ける春の夜の象徴として最も優れて立派なのは、カシオペアの美しい形が低く西北の地平線に隠れて、其の代はりには壯大な北斗七星が漸次に東から登つて來る姿である。北斗は支那の名で、西洋人は之れを大熊星座と言つてゐる。熊といへば、いかにも大きな熊で、七星の中の四角形が腰部に當たり、他の三星が尾となつてゐる。そしてその頭部は、はるか西の方の諸星まで達して、前肢、後肢も、それ相應に長く伸びてゐるのだから、全體としての熊の形は、一寸想像もつかぬばかり恐ろしく大きいものである。しかし長く見馴れると、是等の星の形が、いつしか熊の持つ愛と親しみを與へるやうになるから面白い。



## 牧羊者星座

大熊の後ろから彼れを追ひつゝ、東に上つて來るのが牧羊者星座である。此の星座の中には赤みを帯びた一等星があつて、先づ誰れの眼にも映ずる。此の星はアルクツルスと云つて、其の強大な光輝を以て、昔から世界各國の人々の眼を惹いたものである。

## 獵犬星座

牧羊者の西、大熊との間には、獵犬星座がかすかに光つてゐる。犬は二疋。これは今より二百餘年以前に、獨逸のヘベリウスの發見した星座で、犬は首繩を牧夫の手に握られたまゝ、西に向いて大熊に吠えかゝつてゐる姿であるが、天文學者も隨分味なことを考へたものである。

## 獅子星座

北斗と背中合せに獅子星座がある。獅子の胸に王者の意味のレグルスと呼ぶ一等星が輝いてゐる。色は白くして、光に一種の威嚴がある。此の星は丁度黃道圈上に當たつてゐるので、昔から諸國の天文家に重要視されたものである。ペルシヤでは此の星

味なことを考へたもの。

を「天の四つ柱」の一つに數へたと傳へられる。

夏の天は、遠く南から北に懸かつた天の河の壯觀と、之れを東西に挟んだ七夕の夫婦星とによつて、吾々に最も親しみあるものとなつてゐる。天の河は世界各國の人々に對して、昔から一つの興味ある謎であつた。西洋人は多く之れを道路と見、東洋では之れを河と見た。今の知識から見れば、何れも當たつてはゐないが、彼等が同じものを或は路と見、或は河と見たところに、それ／＼彼等の生活の一面を反映して居て、深い興味がある。

牽牛織女の七夕物語は、吾國には長く親しまれて國民の情生活の最も味はひある一部を成して居る。今更これを説明する必要はないが、此の物語がどうしてかやうな形を備へたかを考へて見るのも一興であらう。天文學の方からいふと、丁度天空のあの邊り、殊に天の河の領分が、昔から新星の最も多く現はれる所である。



そして其の新星は、必ず白、黄、赤……と五色の光を點じつゝ、急激に明滅するのであるが、かういふ事を考へ合はせると、七夕の話は、單なる空想の産物ではなくして、或は、今を去る何十世紀かの大昔にて、も現はれた或る新星の觀察と驚異とから生れたものではなからうか。かう見ると、此の話は意外な學問上の根據を有つて居さうにも思はれる。

ヘルクレス星座

織女星の屬する星座「琴」の西に、三等星を頭としたヘルクレス星座がある。ふと見た處は極めて平凡な星座であるが、最近の研究によると、我が太陽系の落ち行く先きが略、其のあたりであると言ふので、特殊の興味をもたれてゐる。

蛇遣ひ星座

「ヘルクレス」の南の邊りに接して蛇遣ひ星座がある。又此の「蛇遣ひ」の東と西とに同じく「蛇」と名づけられた星座がある。此の「蛇」と「蛇遣ひ」とは元々一つの星座であつたので、此の中の星を眺める

一人の壯漢が蜿蜒たる大蛇を兩手に捧げて、天の一方を睥睨してゐる。

には是非とも一人の壯漢が蜿蜒たる大蛇を兩手に捧げて、天の一方を睥睨してゐる姿を想像しなくてはならぬ。此の星座全部が非常に廣い面積に亘つてゐるので、此の奇妙な想像圖を心に描きながら實際の星を見ると、今更天界の壯絶な景觀に驚かされざるを得ぬのである。

秋の空には、眼を喜ばせるやうな星の形が殆んど無いといつて好いが、冬の空は、地上が滿目蕭條の殺風景を呈するのに對して、素晴らしい美しさを表はす。かのオリオンを中心として、「大犬」「小犬」「双子」「馭者」「牡牛」と、無数の美しい星が立ち並んだ有様の立派さは、到底筆紙の盡くし得る所でない。秋天の淋しさに比べると、天には早くも一陽の來復した趣がある。

オリオンは、其の中央に三箇の二等星が一線に並列して居る形から所謂「三つ星」として吾々には、既に長年の馴染になつてゐる。

オリオン星座



大犬星座

オリオン星座には有名な大星雲がある。それは三つ星の列から南の方へ僅か離れた星のあたりに、肉眼でもぼんやり見られるが、小さな望遠鏡で眺めると、又一段と面白い。

オリオンの三つの星の一線に沿うて少しく南東に眼を移すと、そこに驚くべき光輝ある一星を発見する。これが大犬星座の首位を占むる巨星シリウスであつて、其の光度は全天の恒星中の第一である。普通は一等星二十箇の一に數へられて居るけれども、事實は標準一等星の十三倍の光を發して、長年の間少しも衰へる氣色がない。

此の星は、支那では昔から狼星の名で通つたものであるが、エジプトの古代に於いても、亦此の星が曉天に現はれる頃からナイル河が氾濫すると云ふので、特別な宗教的儀禮の下に崇められた。エジプトの人々が割合に早くから、一年の長さが三百六十五日四

山本一清

天文学者  
理学博士  
前京都帝國大學  
教授  
滋賀縣の人  
明治二十二年生

分の一であることを知つてゐたのは、おもに此の「シリウス」の觀測によつたのだと言ひ傳へられてゐる。  
(山本一清「星座の親み」に據る)

六 傷をなめる獅子

高村光太郎

高村光太郎

彫塑家、著述家  
東京の人  
明治十六年生

獅子は傷をなめてゐる。

どこか知らない

ぼうくゝたる

宇宙の底に露出して、

ざらざら、ざらざら、ざらざら、

遠近も無い丹砂の海の片隅、

つんぼのやうな酷熱の

寂寥の空氣にまもられ、



子午線下の岩、  
突兀たる岩角の上にどさりとねて、  
獅子は傷をなめて居る。

巨大な額は無敵の紋章

そのたてがみはヤアエの鬚髪、  
巨大な額は無敵の紋章、  
速力そのものの四肢胴體を今は休めて、  
静かなりトムに繰り返し、繰り返し、  
美しくも逞しい左の肩をなめて居る。

獅子はもう忘れてゐる、

人間の執念ぶかい邪智の深さを、

あの極樂鳥のむれ遊ぶ泉のほとり、

神の領たる常緑のオアシスに、

水の誘惑を神から盗んで、

きたならしくもそつと仕かけた

卑怯な、黒い、鋼鐵のわなを。

肩にくひこんだ金屬の齒を

肉ごともぎりすてた獅子は昂然とした。

憤怒と、侮蔑と、憫笑と、自尊とを含んだ

たゞ一こゑの叫は平和な椰子の林を震撼させた。

さうして獅子は百里を走つた。

今はたゞ楽しく傷をなめてゐる。

どこか知らない

憤怒と、侮蔑と、  
憫笑と、自尊と  
を含んだたゞ一  
聲の叫。



自由と、潤歩と、  
勇氣と、潔白と、  
未來と光と。

ほうくたる  
つんぽのやうな孤獨の中、  
道にはぐれても絶えて懸念の無い  
やさしい牝獅子の歸りを待ちながら、  
自由と潤歩との外何も知らない。  
勇氣と潔白との外何も持たない。  
未來と光との外何も見ない、  
いつでも新らしい、いつでもうぶな魂を、  
寂寥の空氣に時折訪れる  
目もはるかな薰風に吹きさらして、  
獅子は傷をなめてゐる。

島村抱月

明治大正の文學

者

名は瀧太郎

島根縣の人

大正七年歿

年四十八

モスコイ

ロシアの舊都、

一八一二年九月

十四日ナポレオ

ン此處に攻め入

る。

ナポレオン

(1769-1821)

### 七 運命の丘 その一

島村抱月

モスコイ市の西南、雀が丘の一部、丘頂を舞臺の前面に現はして、背後は一面にモスコイの市街を見下した景色。秋日和の午後二時過ぎの日光が、強くモスコイ河に反射してゐる。市内はすべて本文にある通りの景。軍服のナポレオン、馬を麓に乗り捨てた氣持で、數歩先に立ち、つか／＼と小急ぎに下手から丘の頂に現はれる。續いてダリユー、モルチュール、アンドレイ及び三四の將校從卒等登場。  
ナポレオン、モスコイの市街を見るや否や、  
ナポレオスコイ！ モスコイ！  
と叫んで猶ほ熱心に向うを見て居る。



クレムリン  
露國モスコイの  
宮城

まるで古い繪本  
から抜け出した  
やうな町だ。

ダリュ モスコイだ！ モスコイだ！

他の人々も之れに和して、争うて市街の方を見る。

ダリュ そら見給へあれがモスコイ河だ。その向うがクレムリンさ。

丸の内だ。綺麗ぢやないか。

モルチ なるほど、綺麗だ。まるで古い繪本から抜け出したやうな町  
だな。

ダリュ ああの建物を見給へ。木造だらう。塗つた屋根や壁の色も違  
つてるね。東洋的ぢやないか。その前を、まるで灰色の熊が  
馬に乗つたやうなコザークめが、大槍を横たへて通る所は似  
合つてるな。配合がいゝぢやないか。

アンド 北國に似合はん明るい町ですね。空氣も實に澄んでる。た  
しかに神聖な町といふ感じがしますね。

モルチ 眩しいやうだ。金の十字架がまるで星を散らばらしたやう

に光つてるぢやないか。あれがみんな寺だらうか。寺の多  
い處だな。外廓も内廓も。見給へ、町の半分は寺だ。尖塔が  
まるで雑木林のやうに並んでる。その一本々に金の星が  
かゝつてゐるのだ。

アンド 寺院ばかりが三百近いでせう。それから處々新月の徽章も



島村抱月

光つてゐます。マホメタンの  
寺でせう。かうなると壯觀で  
すね。十字の星と新月が、この  
古い町の空に撒いたやうに浮  
かんで居る。これだけでも胸  
が躍りますね。あれがこの町  
の命なのだ。命の象徴があゝして光つてるのだ。平和です  
ね。ついそこらまで煙硝の煙で重くなつてゐた空氣が、こゝ

十字の星と新月  
が、この古い町  
の空に撒いたや  
うに浮かんで居  
る。あれがこの  
町の命なのだ。  
命の象徴があゝ  
して光つてるの  
だ。

煙硝の煙で重く



なつてゐた空氣が、こゝへ來ると水晶を斷ち切つたやうに澄んでゐる。

へ來ると水晶を斷ち切つたやうに澄んでゐる。その中に強い色を塗り立てた屋根や壁が品を作つてゐる所は、なるほど女性的ですね。ロシア人はこの町を御母さんといふさうだが、私等には、美しい尼さんといふ感じてですね。

モルチ 處々随分大きな庭がある。人家の間に森を切つて撒散らしたやうな處だ。どうしても繪本だ。これが本當にモスコイなのかな。夢のやうだ。

飽かず市街を見てゐたナポレオンは、この時始めてこちらを向き、近くに立つてゐるモルチエールの肩を軽く叩いて、

ナポレ おい！

モルチ はッ！

皆一齊にその方を向く。

おれには初めから、モスコイは目に見えてゐた。必ず來られるものといふ確信があつたのだ。確信は運命だ。運命は事實だ。

ナポレ モスコイへ來たんだよ。氣をたしかに持たなくちやいかんよ。

モルチ 陛下、夢のやうでございますなあ。

ナポレ 夢ぢやあない。本當のモスコイへ來たのだ。到頭來たのだよ。

ダリュ 夢が事實になつたのですね。

ナポレ お前にも似合はん事をいふね。初めから事實さ。夢が何で事實になるものか。おれがパリでセギユール伯に言つて聞かせたのはそこさ。おれには初めから、モスコイは目に見えてゐた。必ず來られるものといふ確信があつたのだ。確信は運命だ。運命は事實だ。

ダリュ 陛下のその筆法によりますと、モスコイは陛下の運命でございますね。



ナポレ 運命だ、全く運命だ。おれには是非とも一度このザールの城へ來なくちやならん運命があつたと思ふ。モスコイは私の愛だ。古いく前世からの愛であつたのだ。先刻一目見た時に、私はすぐさう思つた。今までこの懐かしい愛の都會を人手に委せて置いたのが妬ましいやうだ。

振りかへつて又市街の方を見る。

ダリュ 前世からの愛ですね。約束された土地ですね。人生にはたしかにさうしたものがありません。

モルチ 愛も約束もいゝが、早く陛下をクレムリンへ御供したいものだな。

アンドミ ロラドヴキツチ少將が歸つてから、かれこれ二時間近くにもなりません。もう町の使節が來てよい時刻ですね。あゝ御覽なさい。今やつと敵軍の後衛が町を出はづれました。

あの森の蔭に續いてるのがそれです。あれでクツーツフ元帥の率ゐて居る九萬の兵が、すっかり退却した譯です。

ダリュ やあ、ミュラー將軍が市街の入口で盛んに観迎されてゐるぞ。貧民どもが珍らしさうに集まつて來るぢやないか。まるで觀せ物扱ひだ。

ナポレ クレムリン！ 響きのいゝ言葉だ。あの邊が宮城だらうな。おい！ 地圖を見せないか。

アンドレ 市街の地圖を披いて捧げる。ナポレオン手に取つて見て、

ふむ。

顔を上げ、また市街に見入つて、あれだ。クレムリン、クレムリン。おれは嘗てその宮中の繪を見た事がある。あの大きなサロンには、さうく、イタリヤ



から磨かせて来た大きな大理石の柱があつた。あの前にアレキサンドルと后とが腰をかけて居た。あのアレキサンドルの神経質らしい顔は、決して憎い顔ぢやない。私の兄弟にして、つき合つてやりたいと思つた。

直立してゐた將校等互に顔見合はせる。ナポレオン願みて、

ねえ、さうだらう？ 全くロシヤ人は憎くない國民だと思はないか。おれは好きだよ、おれは。

モルチ 全く憎さげの無い國民でございますな。のろツとしてゐて、素直で、勇敢で。

ダリユ いや、我々の脈管に流れてゐる血が、同じケルトの源だから……アンドそれもさうでせうが、一方からいふと、むしろ違つてゐるから相引くのかも知れません。冷たい外部の壓迫で反抗的に沸

ねえ、さうだらう？ 全くロシヤ人は憎くない國民だと思はないか。おれは好きだよ、おれは。全く憎さげの無い國民でございますな。のろツとしてゐて、素直で、勇敢で。

自然が温めてくれた我々の血は冷熱が早い。

いた彼等の血は永久に熱いのです。ところが、自然が温めてくれた我々の血は冷熱が早い。僕はむしろ、僕が西南の人であるといふ理由で、この東北の神祕な國民を慕ひたいと思ひます。

モルチ は、君のいふことは、あんまり感に入り過ぎていかんよ。第一我々は征服者だぜ。強きものが弱きものを愛する關係だぜ。忘れちやあいかん。

アンドですが、愛は強い弱い的關係ではありません。

モルチ は、生意氣な事をいふなよ。

ダリユ まあ、いゝさ。若いからな。戦をしながら人生を論ずる筆法だらう。ねえ、君。

ナポレオンは地圖を巻いて手に持ったまゝ、そこらを大股に往つたり來つたりして居たが、寄つて來て、



ナポレまだ來ないか。遅いぢやないか。

モルチもう來さうなものでございますな。おい君、一つ偵察にやつてくれ。

アンドは。

下手へ行つて何か命ずると、一人の士官急ぎ足に降り去る。

### 八 運命の丘 その二

島 村 抱 月

ダリュ 陛下はお疲れであらうから、そこらへ假りに何したらどうだらう。

ナポレ いらん、く。おれの顔に疲れが見えるか。

ダリュ いや、お顔色はかへつて益活氣を帯びて參るやうでございます

すが、何にしても一週間以來のお疲れでございますから。

ナポレ おれには疲勞といふ事は無い。この眼の輝くのは、それ、運命が眼の前に來たからさ。この晴れた空に、この壯麗な景色を見て興奮せずに居られるか。ダリュエーなども顔色が違つて來たぜ。ついさつきまで君等の顔にはボロデイノの影が粘りついてゐた。死の影がついてゐた。それが今ぢやモスコの影が反射してゐる。生の影だ。みんなの眼が躍つてゐる。今にクレムリンの城へ入つたら、君等が一番がけに何をするだらうな。モルチユールは何が欲しいか。

モルチ 久しぶりで善い葡萄酒でも御馳走になりませうかな。

アンド 私は先づ靜な部屋に引つ込んで、この興奮の心の褪せない内に、日記をつけたいものがございます。

ダリュ 私もそれに賛成。

興奮の心の褪せない内に、日記をつけたい。



ナポレさうく、ダリユーは歴史家で詩人だつたな。  
ダリユ「だつたな」は恐れ入りました。

ナポレ忘れて居たのだよ。

ダリユ 忘れられて少しも恨みはございませんな。私などは新世紀  
の上にさしかけてゐる十八世紀の影のやうなものですから。  
ナポレ は、悟つたね。

ダリユ 却つてこのアンドレー君などが、十九世紀の若い息を呼吸し  
て居て、自然と詩人になつてゐます。

ナポレ ふん、若い者の時代か。おれなどは、ダリユー、どちらの組か。  
若い方か。古い方か。

ダリユ さやう——陛下は勿論私なぞよりも若くていらせられるし、  
國家の上では新らしい時代を代表せらるゝのでございませ  
う。

十九世紀の若い  
息を呼吸して居  
て、自然と詩人  
になつてゐま  
す。

十八世紀の纖弱  
な冷たい文明に  
對して、強い勢  
力の要求が陛下  
のお體に權化し  
た。

私は運命の權化  
だ。

神仙の如き高  
風。

ナポレ そのわけは。

ダリユ さやう……十八世紀の纖弱な冷たい文明に對して、強い勢力  
の要求が陛下のお體からだに權化したと申したら、如何でせうか。  
ナポレ ふむ。併しその力は何處から來るだらう。私わに言はすれば  
運命だ。運命！ 力はそこから來る。若し私が十九世紀の  
時代を暗示するとしたら、私は運命の權化だと言つてもらひ  
たい。

アンド (進み出でて)陛下、私は唯今の瞬間に於いて、陛下に神仙の如き  
高風を感じます。運命の權化！ 何といふ深い御言葉でご  
ざいませう。手がこの通り感激に顫へて居ります。どうか  
握手を願ひたうございます。

ナポレ よしく。

微笑しながら固く握手する。その途端に市街の方で爆



發の音が一つする。皆々愕然としてその方を向く。ナポレオンも俄に正氣づいたやうにきつとなる。

モルチあれだ。外廓に接した東の處に煙が上つてゐる。何事だらう。うむ。騎兵が入つて行くやうだから、今に分かるだらう。こりや長くかうして居るのは危険かも知れんよ。使節はどうしたのだらう？ どうして遅いのだらう？

一同無言で待遠しい様子に市街の方を見る。ナポレオンこちらを向いて、

ナポレ 今に来る。きつと来る。さつきの報告はまだか。もう一度偵察にやつて見い。

アンドは。

再び下手へ行つて命令を傳へる。

ダリュ町がだんくく静かになつて来るやうに感ずるが、どうかね。

動く光線や活きた音波の刺戟といふものが、まるで無くなつたやうな感じがする。

動く光線や活きた音波の刺戟といふものが、まるで無くなつたやうな感じがする。見給へ、馬鹿に森として來たぢやないか。河の瀬の音が聞こえる。

モルチ は、生の町がまた死の町になつたかな。

ナポレ (モルチチェールの方へ鋭い一瞥を投げて) 馬鹿ツ！

モルチ (姿勢を正してナポレオンの方へ向き) 陛下、お氣に觸りましたら御免下さいませ。併し私は飽くまでも戦地といふことを忘れてたくないと思ひます。モスコーに何時敵軍が現はれても驚かない覺悟はして居たいと思ひます。私は今以て、まだ確實にモスコーを占領したとは思つて居りません。

ナポレオン無言のまま、往つたり來たりしてゐる。皆々無言。一同の胸に一種の氣まづい心持が流れ込む。しばらくして、



ナポレ分かつたよ。分かつたよ。併し私わたくしはもう確實に占領した積りて居るね。さつきからクレムリンの宮城で大夜會を開く手筈まで考へて居る。二百九十五寺といふ夥しい寺の坊主どもを集めて諭してやらうと、その演説の腹案までこしらへた。このモスコイにはお前等のうち誰れを總督にしようかと、そんな事まで考へて居る。モスコイ占領！ もう動かん事實だ。夢ぢやない。

と言つて、じつと市街の方を見下して立つてゐる。皆々同じ方を見て無言。この時、一同の胸に一種の不安が萌す心持。やがてナポレオンはそこを歩きはじめ。

ダリユもう何時だらう。日があんな方へ行つたね。どうだらう。兵をやつてロストプチン總督を連れて來させては。

モルチどうもそれがよくは無いかな。暗くなると面倒だぞ。さつ

きの爆發が何か意味があるのぢやなからうか。

ナポレオンはまた市街の方を見て沈黙してゐる。日影が薄くなつて、處々の庭木の森が黒ずんで來る。間を置いて、

アンドあゝ、來た〜！ 報告を持つて來た。

騎兵一人飛び下りて、アンドレの前に直立し、封書箱を渡す。手早く開いて、

あゝ、これはさつきの爆發に關聯した事です。(急いで讀む中に顔の色が變はる) これは怪しからん。大事件でございます。皆々驚いて聞き耳を立てる。ナポレオンも無言で立つて聞いてゐる。

ロストプチン總督が囚徒を悉く解放した様子で、その一人が先程の爆發に關して我が軍に捕縛せられました。場所はドロゴミロフの門に近い市街の空家で、爆發の原因等は不明出



火にはならなかつたが、附近で舉動不審な一人のダットン人を捕縛したのださうです。

モルチ そのダットン人を調べて見たのか。

アンド 取り調べたが更に口を開かないとあります。

モルチ そりや容易ならん事だ。すぐ市街を警戒しなくちやなるまい。

アンド 勿論やつてるさうです。

モルチ それからその捕縛したダットン人は連れて來たのか。居るなら此處へ連れて來いつて。通譯をつけてな。

ナポレなあに心配するには及ばない。大勢はもう極まつてゐる。

この運命は動くものぢやない。そいつは追ッ放してやれ。

モルチ でございますが、この際注意しませんと……。

ナポレ いゝさ、く。それは何か偶然爆發したんだらうよ。偶然の

事だ、恐るゝに足らん。

立つてゐる騎兵に向つて、

さういつて行け。

騎兵敬禮して引きかへす。

それよりか、一方の様子はどうか。一向に報告が來んぢやないか。誰れかこのうちで行つて見い。

アンド 私が参りませう。

敬禮をして行かうとする時、第二の傳令來る。

アンド お、報告か。

下手へ急ぎ足に行くと、馬から飛び下りた士官、あわてた様子で、聲をひそめて話す。アンドレーの顔色またく變はる。他の二人も寄つて來て、報告を聞き、顔を見合はす。一寸密話をしてナポレオンの方を振り向くと、立つて鋭くその方を見てゐたナポレオンの眼と見合つて、あ



わて、他を向く。同時にアンドレイがつか／＼と群を離れて進み寄り、顫へた聲で、

アンド陛下、モスコイは空虚でございます。

ナボレえ、？ モスコイが空虚？

アンドはい、空虚でございます。

ナボレオンは聞くと同時に、アンドレイの上に投げた鋭い眼光を、市街の方へ轉じて、無言のまゝおつと見てゐる。顔の色變はる。アンドレイその他皆々佇立したまゝ、一齊にナボレオンの横顔を見つめて身動きせず、しばらくの間、森として聲なき氣持。

ナボレ馬車を持つて來い。

士官の一人走り去ると、跡からナボレオン大股につかつかと丘を下手に降りる。皆々沈黙のまゝ續いて降り去る。丘の上には夕日が淋しく薄れて残る。〔「運命の丘」〕

### 九 つれ／＼なるまゝに

ト部 兼好

つれ／＼なるまゝに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物ぐるほしけれ。

人は容貌ありさまの勝れたらむこそ、あらまほしかるべけれ。

ものうち言ひたる聞きにくからず、愛敬ありて、詞多からぬこそ、あかず向はまほしけれ。めでたしと見る人の、心劣りせらるゝ本性見えむこそ口惜しかるべけれ。品かたちこそ生れつきたらめ、心はなどか賢きより賢きにも移さば移らざらむ。かたち心ざまよき人も、才なくなりぬれば、品くだり顔にくさげなる人にも立ち交



りて、かけづけおさるゝこそ本意なきわざなれ。

雪の面白う降りたりし朝、人のがりいふべき事ありて、文をやる  
とて、雪の事何ともいはざりし返事に、この雪いかゞ見ると、一筆の  
たまはせぬほどのひがくしからむ人の仰せらるゝこと、聞き入  
るべきかは。返すくゝ口惜しき御心なり。」といひたりしこそ、をか  
しかりしか。今は亡き人なれば、かばかりの事も忘れ難し。

家居のつきぐしく、あらまほしきこそ、假の宿とは思へど興あ  
るものなれ。よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入りた  
る月の色も、一際しみぐと見ゆるぞかし。今めかしく、きらゝな  
らねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、箕子  
透垣のたよりをかしく、うち有る調度も昔覚えてやすらかなるこ

よき人ののどや  
かに住みなした  
る所は、さし入  
りたる月の色も  
一際しみぐと  
見ゆるぞかし。

心の儘ならず造  
りなせるは、見  
る目も苦しくい  
とわびし。

後徳大寺の大臣  
左大臣藤原實定  
建久二年薨

綾小路宮  
龜山天皇の皇子  
惠法親王



吉田兼好

がらへ住むべき、また時の間の煙と  
もなりなんとぞ、うち見るよりも思  
はるゝ。おほかたは家居にこそ事  
ざまはおしはからるれ。

そ心にくしと見ゆれ。多くの工の心を盡くして磨き立て、唐の大  
和の珍しく、えならぬ調度どもならべ置き、前栽の草木まで心の儘  
ならず造りなせるは、見る目も苦しくいとわびし。さてもやはな  
行が見て、鳶の居たらん、何かは苦し  
せじとて繩を張られたりけるを、西  
かるべき。此の殿の御心、さばかりにこそ。」とて、其の後は参らざり  
けると聞き侍るに、綾小路宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや  
繩を引かれたりしかば、彼の例思ひ出でられ侍りしに、誠や烏の群

九つれぐなるまゝに



れ居て、池の蛙を捕りければ、御覽じ悲しませ給ひてなんと、人の語りしより、さてはいみじくこそと覺えしか。徳大寺にも如何なる故か侍りけん。

丹波に出雲といふ所あり。大社を遷してめでたく造れり。志田の某<sup>（まがし）</sup>とかや、知る所なれば、秋のころ、聖海上人其の外も人あまたさそひて、いざたまへ、出雲をがみに。かいもちひめさせん。とて具

香にほひ妙なる色にあらはれてみりの花や春をつぐらむ兼好

兼好筆蹟 しもていきたるに、お

のおの拜みて、ゆゝしく信おこしたり。

御前なる獅子狛犬そむきて、うしろさまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、あなめでたや。此の獅子の立ちやういと珍し。

殊勝の事は御覽じとがめずや、無下なり。

深き故あらん。と涙ぐみて、いかに殿ばら、殊勝の事は御覽じとがめずや。無下なり。といへば、おのく怪しみて、まことに他にことなりけり。都のつとに語らん。などいふに、上人なほ床しがりて、おとなしく物知りぬべき顔したる神官をよびて、此の御社の獅子の立てられやう、定めて習ひある事に侍らん。ちと承らばや。といはれければ、其の事に候。さがなき童部<sup>（わらべ）</sup>どもの仕りける、奇怪に候事なり。とて、さしよりて、据ゑなほしていにければ、上人の感涙いたづらになりけり。

寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか。愚かなるか。

寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか。愚かなるか。愚かにして怠る人の爲めにいはゞ、一錢かろしといへども、これを重ぬれば、貧しき人を富める人となす。されば商人の一錢を惜しむ心切なり。刹那おぼえずといへども、これをはこびてやまざれば命を



終ふる期忽ちに至る。されば道人は、遠く日月を惜しむべからず。たゞ今の一念むなしく過ぐる事を惜しむべし。

〔徒然草〕

### 一〇 趣味の嚴島

嚴島の興味は限りなく多い。けれども趣味の眼から見たる嚴島の中心の味はひは、第一に彌山みやまを背景として立つた低い美しい社殿を、あの大鳥居の邊から眺めた所にあるであらう。まづ藝州本土の對岸から船を僦つて、ギイ〜と櫓の音面白く漕ぎ出でる。青一色で塗りつぶしたやうな、恰好の好い島だと思ひながら、漕いで行くと、その一色の中から、違つた色彩の社殿や堂塔やが次第に著しく浮き出でて来る。初めには木片を立てたやうに見えるた鳥居が、段々と大きさを加へて来る。また漕ぐ程に、鳥居も社

彌山  
宮嶋の峻嶺にして標高四百五十五米。

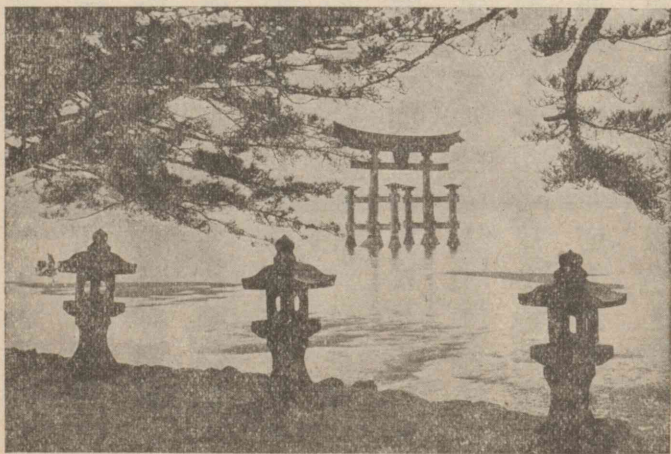
青一色で塗りつぶしたやうな恰好の好い島だと思ひながら漕いで行くと、その一色の中から、違つた色彩の社殿や堂塔やが次第に著しく浮き出でて来る。

俄に驚きの目を見はらせられるであらう。

海を壓して跨つて居るではないか。

其の色彩を見よ

殿堂塔も、ますます〜大きき鮮かさを加へて来る、其の中に、次第に進んで大鳥居の下に來ると、吾等は俄に驚きの目を見はらせられるであらう。見よ、目の前には高さ八間五尺三寸、棟の長さ十二間五尺一寸四分の、地軸とも天柱ともいふべき朱塗の巨柱が、海を壓して跨つて居るではないか。向うを見ると、青雲の中に沖つた彌山の麓には、二十幾棟の社殿が、美しく左右に伸びて、赤い柱やゆるやかに反つた檜皮葺の神々しい姿を水面に映して居るではないか。其の色彩を見よ、形状を見よ、一つ一つの建物の整つた



嚴島神社大鳥居



形状を見よ、一つづつ建物の整つた姿を見よ、多くの建物が美しい釣合を現はして居るのを見よ。

門客神社  
惠比須を祭る。

大鳥居が海中に仁王立ちに立つて居る。

姿を見よ、多くの建物が廻廊や橋に繋がれて美しい釣合を現はして居るのを見よ。何といふ美しさ氣高さ神々しさであらう。社殿の中心たる本社の寶殿は桁行十三間八寸二分、梁行六間二尺二寸七分あるといふが、其の前に幣殿があり、幣殿の前に拜殿があり、其の前に板殿があり、其の前に高舞臺があり、其の前に平舞臺があり、又其の前に門客神社二棟と左右の樂房とが四棟相並んで、其の尖端は銅の燈籠一基を建てた廊嘴の謂はゆる舌先に終はつて居る。そして大鳥居が此の舌先の前方七十間の海中に仁王立ちに立つて居る。此の寶殿、拜殿を中心として、檜皮葺、瓦棟の多くの建物が朱塗の圓柱に支へられて低く美しく並んで居る趣、切妻、入母屋、縦向き、横向き、いろくの社殿が仲よく馴染んで、大鳥居が翼をひろげたやうに横長に立つて居る趣、更に晝は鮮かな色と美しい形とを細かに見せ、夜は百八の燈火——本社内陣の百八燈に東西松

大元浦  
嚴島神社の西北の濱、大元神社あり。

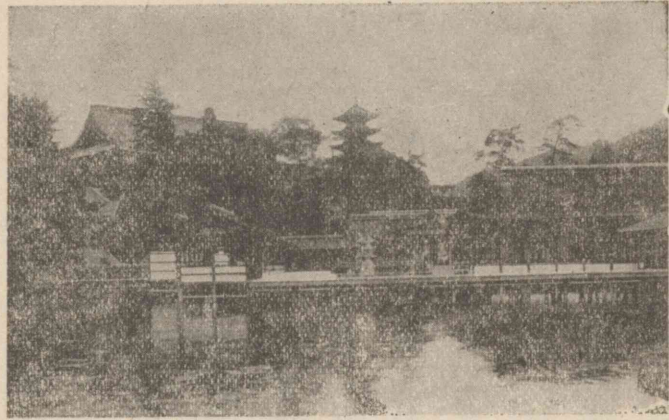
重疊累積した美しさ床しさ。

の間の百八燈を加へると三百二十四燈、更に御笠濱、西の松原、大元浦の白砂青松の間に點在する石燈籠を加へると夥しい數に上る燈火——を天上の星にまがへ、更に干潮には、大地に立つた脚長のすくやかな姿を見せ、満潮には波の上に浮かんだ龍宮城の幻のやうな光景を見せる趣、是等の凡てが何とも云はれぬ調和を成して、緑の山と白波の海との間に鎮つて居る趣、高さ、大きさ、物々しさ、荒荒しさは、前後の護衛者たる山や海や鳥居やに譲つて、社殿自らは、千木も、堅魚木も、鴟尾も、鯨鉾もない、尋常な檜皮葺を朱の圓柱に支へられて、低い謙遜な姿を横たへて居る趣。この重疊累積した美しさ床しさを何に譬へようか。私はあの社殿を見る毎に、よくこんな事を考へる。設計者の鬼神は、海底で出來あがつた龍宮城を嚴島のあの入江に据うべく、波の上にせり上げたであらう、靜かにせり上がるのを凝視しながら、山と海とに對する釣合を見計らつ



之れを眺める恰  
好の立脚點

海陸の双美を併  
せ備へ、時の晝



嚴島神社本殿

て、是處だ！といふ處で、ピタリとせり上げを中止させたであらう、  
そして之れを眺める恰好の立脚點を  
今の大鳥居の位置に定めたのであら  
うと。或は又こんな事を考へる。人  
界の天才建築家が自家の新工夫に成  
つた新社殿を現すべく、あまねく國々  
を遍歴して、遂に詠へたやうな地相を  
此の嚴島に見出したのであらう。  
そして此の島の浪打際から絶頂まで、  
又周回七里三十一町の隅々まで限な  
く調べて、遂に恰好の地點を、この北寄  
の一隅の凹の字の形をなした入江に  
見出だして、此處に海陸の双美を併せ備へ、時の晝夜、潮の干満につ

夜、潮の干満に  
つれて、日々夜  
夜に變幻の妙趣  
を現し得る新社  
殿。

れて、日々夜々に變幻の妙趣を現し得る新社殿、高き山廣き海と雄  
を競はずして、却つて之れを従へ得る新社殿を作らうとしたので  
あらうと。とにかく此の社殿の工人は、すばらしい新意匠を懷い  
て、いみじくも之れを完成し圓現したものと云はねばならぬ。  
私は嚴島のこの景觀に感じて、曾て古風の長歌を詠じたことが  
ある。

大鳥居 御前に立たせ、大彌山、しりへに立たせ、  
大海に、御影をうつし、はかりなき、數の燈籠、  
みまはりに、星とならべて、低き廣き、朱の大宮、  
世をしづめ、海山鎮め、國やはし、人をなごめて、  
常磐の、大磐石と、しづまりますも。

神社の周圍だけを見ても、社の背後には青々と茂つた丘陵が立  
つて居る。社の前は玉を敷きつめたやうな白砂の洲となつて、岸



邊には老木の松が長く緑の枝を垂れて居る。そして潮が満ちて  
来ると、東西二十五間、南北三十三間の廻廊が、板敷まで水に浸つて  
華やかな浮城の趣を見せる。晝もよい。夜もよい。月の夜は更  
によい。燈明の夜、殊に總燈明の夜は更に／＼よい。是處に伎樂  
舞樂、能樂、田樂があり、内侍があるのだ。一代豪華の平相國清盛を  
引き、鹿苑院義満を惹きつけたのも無理がない。

(遠近)

吉田絃二郎

小説家、文學者  
本名は源次郎  
佐賀縣の人  
明治十九年生

一一 童心童眼

吉田 絃 二郎

人間といふ自分自身の姿、自分の心の姿を靜かに見つめるといふ事は、吾々の生活に取つて最も大切な事である。大抵の人々は、日々夜々のはげしい勤めの爲めに、自分自身の心の姿を見つめる機会を餘り持ち得ないやうである。またそのやうな機會を持た

うと心がけてもゐないやうである。

今日では殆んど繪の上の常套的な構圖になつてゐるが、古い傑  
れた作品の中に、よく一羽の白鷺が水のほとりにつくねんと佇ん  
で、自分の姿を水に映して、眺め入つてゐるのがある。これは繪畫  
上の單なる構圖としても、面白い古雅な味のある形である。限り  
もなく廣い靜かな水の上には、何一つ目を遮るものもない。そこ  
には何も無い空無の世界のみが廣がつてゐる。その何も無い空  
無の世界の眞中に、たゞ一羽の白鷺が、ちつと水の上の一點を凝視  
してゐる。絶対無の境に置かれた、たゞ考ふるところの一つの存  
在である。

かう考へて来ると、一羽の白鷺の圖も、なか／＼味のある聯想を  
與へてくれる。吾々個々の人間は、一つの考へるところの存在で  
ある。絶対無の境に置かれた一羽の白鷺である。あのたゞ一羽

何もない空無の  
世界の眞中に、  
たゞ一羽の白鷺  
が、ちつと水の  
上の一點を凝視  
してゐる。

吾々個々の人間  
は、一つの考へ  
るところの存在



である。絶對無の境に置かれた一羽の白鷺である。

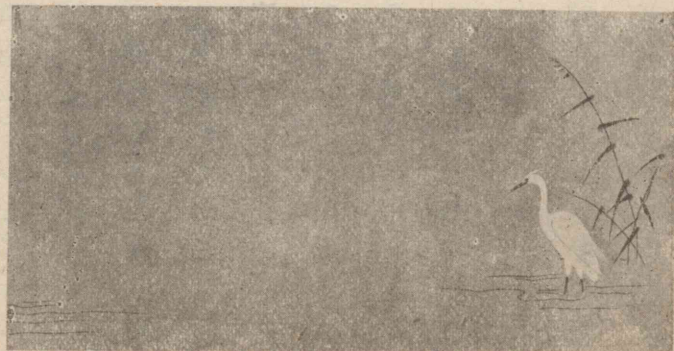
藝術なり、哲學なりを味はへるといふのも、畢竟は靜かに自分の心の姿を見つめたいがためである。

の白鷺が水のほとりに佇んでゐる姿に尊い味があると同様に、ただ一人靜かに自分の心を見つめてゐる人の生活にも尊い味がある。

歌を詠むこと、俳諧を樂しむこと、繪を書き音樂を聽くこと、其のほかすべて藝術なり、哲學なりを味はへるといふのも、畢竟は靜かに自分の心の姿を見つめたいがためである。

たとへば、一叢の蘭の葉を描くとする。

墨の濃淡筆の勢にも、その刹那の自分自身の心の姿があらはれて來る。お茶を立てるとする。一碗の茶の味にも自分の心の影がはつきりと映つて來る。ピアノの前に腰をおろして鍵を打



一羽の白鷺

吾々の心には形がない。けれども心の内のひらめきはいろ／＼な形となつて外部に現はれて來る。

ベートーヴェン (1770-1827) ドイツの音楽家

近松門左衛門 元祿時代の有名な浄瑠璃作家 實名は杉森信盛 享保九年歿 年七十二

つ。たゞ一つの音階にも、自分の心臓の脈搏が傳はつて來るのである。

吾々の心には形がない。けれども心の内のひらめきは、いろ／＼な形となつて外部に現はれて來る。その外部に現はれて來たいろ／＼の尊い形を通して、吾々は人間の心の尊さ、深さ、有難さを想像することが出来る。ベートーヴェンの音樂を聽く時に、或ひは近松門左衛門の作品を讀む時に、吾々はどうしても人間の心の深さについて、嚴肅さについて、高さについて、或ひは寂しさについて考へざるを得ない。そこには吾々自身の心の姿の深さも、嚴肅さも、あはれさも、尊さも、そのままに映し出されてゐる。

人間が生きてゐる意義を、人類全體の幸福のためとか、神の攝理のためとか、かう云ふ風にきめてしまふ人がある。或ひはさうであるかも知れない。けれども斯様な人生の見方は、やゝもすれば



あまりに大ざつばな掴み方に墮ち易い。それはあまりに疎雑で頼りどころのない感じがする。偉大な人、偉大な宗教家といふやうな人にはそのやうな悟りも出来るであらうが、凡夫下根の身には、そのやうな悟りはなか／＼出来さうもない。釋迦のやうなえらい人でも、發菩提心の原因は病老死苦の歎きであつた。病老死苦の歎きはつまり吾々凡夫下根の歎きそのものである。何故に人は病み、老い、死するかといふ歎きは、吾々を驅つて靜かに人間の運命について考へさせる。人間の心の姿を見つめさせようとする。釋迦の結跏趺坐の苦行は、要するに吾々が靜かに自分の心の姿を見つめようとする努力に過ぎない。吾々は山にこそ入らざれ、日々夜々人間の病について、老について、死ぬことについて考へ、恐れ、をのゝきつゝあるのである。

この老を悲しみ、病を恐れ、死を恐れる心、これが人間の自然の心である。もし老も病も死も恐れないなどいふ人があらば、それは嘘である。私は平氣でそのやうな事をいふやうな人の宗教や修養法を輕蔑する。恐れるが故に生について考へる、死について考へる、人間の運命を、人間の心の姿を見つめようとする、菩提の光を求めようとするのである。無理に自分の心をかたくなにして病も恐れない、死も恐れないといふのは、すでに心が堅い殻に包まれてしまつて居るのである。死を恐れ悲しむがゆゑに、吾々は生きてゐる現在の有難さを心行くまで味はひたいと思ふのである。吾々は一文の値をも拂ふことなくして生れて來た。しかも吾はそこに値ぶみすることのできないほど尊い人間の心を惠まれて來た。また一文の値を拂ふことなしに、太陽を惠まれ、微風を、鳥の聲を、雲の色を、青空を惠まれてゐる。

生きてゐる間に、吾々は自然によつてめぐまれた太陽と、青空と、



西行  
鎌倉時代の歌僧  
俗名佐藤義清  
建久元年歿  
年七十三

芭蕉  
元祿時代の俳人  
本名松尾宗房  
元祿七年歿  
年五十一

鳴立澤  
相模國大磯の西  
方

象潟  
羽後國由利郡象  
潟町の附近に古  
址あり。

大井  
東京市品川區大  
井町

微風と、鳥の聲と、波の音と、夕焼の色とを、貪りつくす程の心で味は  
つて見たい。西行といひ、芭蕉といひ、一生を家もなく送つたのは  
そのためではなかつたか。

かれらは家をも土地をも持たなかつた。しかし吉野山の櫻も、  
石山の月も、鳴立澤も、象潟の合歡の花も、日本國中の山も川も、皆彼  
等のものであつた。すべてのものを捨て、天地といふものの懐  
に一身を委ねてしまつたからである。

吾々は芭蕉や西行のやうに家を捨て、自分ひとりて歩いてゐ  
るわけには行かないかも知れぬ。しかし其の心持だけは眞似て  
見たい。殊に目まぐるしい近代の都會生活を送つてゐる人々に  
あつては、一層この心掛が必要なことであると思ふ。

七八年以前のことであつた。私は大井の奥に友人をたづねた。  
五月ごろで、さんざしの花が咲き、麥の穂が丘を埋めてゐた。その

時ふと、秋の時雨でも聽くやうな静かな音をして、雨がさつと降つ  
て來た。私はその時、一枚々々の葉の面を打つて行く雨の音を聽  
いた。何といふ静かなものわびしい音であらう。たしかに私は  
十年以上もその雨の音を忘れて居たのであつた。吾々のあわた  
だしい都會生活は、この静かに木の葉の上に落ちてゆく雨の音を  
聽くことすら忘れさせてしまつたのである。

吾々の魂の上には二重にも三重にも堅い殻が被せられてしま  
つてゐる。よほど強い人工的の刺戟でなければ、大抵の場合に感  
ずることができなくなつてゐる。けれども神は静かなるところ  
に來ると云つた哲人があるやうに、神が吾々に近づく時は、極めて  
低い静かな聲音でやつて來る。餘程心の面を平靜に保つて、一滴  
の露の落ちてゆく音にも、一枚の木の葉の散つて行く聲にも、氣を  
つけてゐなければ、神の聲音を聽くことは出來ない。

一滴の露の落ち  
てゆく音にも、  
一枚の木の葉の  
散つて行く聲に  
も、氣をつけて  
ゐなければ、神



の聲音を聴くことは出来ない。

一葉落ちて天下の秋を知る。

夜明け方の湖の面を見つめてみると、さゝ波一つ立て、はるない。あの夜明の湖水の心が必要であらう。夜明の湖水は波一つ立て、ゝゝるないゆゑに、東雲の美しい雲の色をもうつし、目に見えぬ微風の姿をも現ざることができるのである。一葉落ちて天下の秋を知るといふが、一枚の木の葉の落ちる音にも、一片の花びらが落ちる聲にも、もし心をすまして聴いてゐるならば、神の聲がある筈である。

饒舌な人と半時語つてゐるのは、随分つらい、そして何の得るところもない。けれども縁日て買つて來た廉い一鉢の花とならば、一日對坐してゐても飽きることがなく、そして何とも云へぬ心の悦びを見出だす。芭蕉は俳談の他談ずべからずといつた。吾々は出来るだけ沈黙を守つてゐたい、そしてつとつと親切な眼で、人生を、自然を觀たいと思ふ。おしやべりをしてゐる間は、心が眠

吾々は出来るだけ沈黙を守つてゐたい、そしてつとつと親切な眼で、人生を、自然を見たいと思ふ。

つてゐるのである。

私はこのごろ、庭の山茶花が疲れて來たのを見て、人に頼んで、郊外の麥畑へ植ゑかへた。さて植ゑかへた處へ行つて見ると、驚くではないか、其の幹も葉も眞黒になつてゐる。今まで庭前に置いてある間は、山茶花の幹が、自然の色を失つてゐることに氣づかなかつたのである。吾々都會生活者の心もまたこの山茶花のやうに煤に汚されてゐるのではないか。吾々の嗜好や趣味もまた、この山茶花のやうに不健全になつてゐるのではないか。

田舎に住んでゐる少年達は山の水のうまさを知つてゐる。土の香のなつかしさを知つてゐる。吾々は都會に住んでゐるがために、人工的のいろ／＼な刺戟は知つてゐるが、山の水のうまさをも、土の香の懐かしきをも、山の空氣の感觸をも忘れてしまつてゐる。不具の生活を生きてゐるがゆゑに、不具の刺戟をもとめてゐる。



るのである。

私は庭に雀のお宿を拵へてやつてゐるが、今丁度子雀が巢立つたところなので、その子雀が毎日米をたべに集まつて来る。ところが、大きな雀は人を疑つて二三粒たべてはすぐに飛んで行くので、大きな雀だけ居るうちは、一向米が減らなかつたが、子雀はまだ人を疑ふことを知らず、策の中へ四五羽づゝ這入りきりになつてたべてゐるので、彼等が来るやうになつてから米の減りかたが著しく目立つて來た。私はこの子雀の何ものをも疑ふことを知らないのを見てゐると、實にいゝ氣持になるのである。

吾々の世界でも、かつてはこの小雀のやうな時代があつた筈である。あゝ、いふ世界が、どうかして吾々の世界にも取り戻されなければならぬ。童のやうに悲しい事を悲しみ、嬉しいことを嬉しがり、腹立たしいことを憤る人間が、一番尊いのである。信じなけ

ればならぬものを信ずることが一番大事である。そして吾々はこの心を一番多く失つてゐるのである。

童の素直な心で人を思ひ、童の素直な眼で物を見るといふことが、藝術にも、すべての人事にも、一番大切であると、私は思ふ。

〔わが詩わが旅に據る〕

### 一一一 東山より不破關まで

(東 關 紀 行)

仁治三年の秋八月十日あまりの頃、都を出でて東へ赴くことあり。まだ知らぬ道の空、山かさなり江かさなりて、はるばる遠き旅なれども、雲を凌ぎ霧を分けつゝ、屢、前途の極りなきに進む。終に十餘りの日數を経て、鎌倉に下り著きし間、或は山館野亭の夜のとまり、或は海邊水流の幽なる砌に至る毎に、目に立つ處々、心とまる

仁治三年  
四條天皇の御代  
の年號(一九〇  
二)



逢坂の關

逢坂の關の清水に影見えて今や引くらむ望月の駒。

(拾遺集紀實之)關は京都と滋賀縣との國境にあつた。

遊子云々

遊子猶行、於殘月、函谷雞鳴、(賈島)

打出の濱

大津市松本石場附近

粟津の原

滋賀縣滋賀郡膳所附近

飛鳥

奈良縣高市郡高市村

ふしと、を書き置きて、忘れず忍ぶ人もあらば、自ら後のかたみにもなれとてなり。

東山の邊なる住みかを出でて、逢坂の關打過ぐる程に、駒引きわたる望月の頃も漸く近き空なれば、秋霧立ちわたりて、深き夜の月かげほのかなり。木綿附鳥かすかにおとづれて、遊子猶殘月に行きけん函谷のありさま思ひ出でらる。

關山を過ぎぬれば、打出の濱粟津の原なんど聞けども、未だ夜のうちなれば定かにも見わからず。昔天智天皇の御代、大和の國飛鳥の岡本の宮より、近江の志賀の郡に都うつりありて、大津の宮を造られけりと聞くにも、この程は舊き皇居の跡ぞかしと覺えて哀れなり。

さゝ波や大津の宮のあれしより

名のみ残れる志賀のふるさと

勢多の長橋

滋賀縣栗太郡、琵琶湖に發する勢多川上流の橋

滿誓沙彌の歌

世の中を何に譬へむ朝びらき漕ぎいにし舟の跡なきがごと。

(萬葉集)

篠原

滋賀縣野洲郡

南山云々

影没、南山、青澁、波沈、夕日、紅淵淪、白樂天

こそ……とまりけるが。

こそ……限らざりけめ

飛鳥の川の淵瀬世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬となる(古今集讀人不知)

曙の空になりて、勢多の長橋うちわたす程に、湖遙かにあらはれて、彼の滿誓沙彌が、比叡山にて此の海を望みつゝ、詠めりけん歌、思ひ出でられて、漕ぎ行く船の跡の白波、誠にはかなく心細し。

世の中を漕ぎ行く船によそへつゝ

ながめしあとをまたぞながむる

篠原といふ處を見れば、西東へ遙かに長き堤あり。北には里人住みかを占め、南には池の面遠く見えわたる。向ひの汀、緑深き松の群立ち、波の色もひとつになり、南山の影をひたさねども青くして混濁たり。洲崎處々に入り違ひて、葦かつみなど生ひわたれる中に、鴛鴦鴨の打群れて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。都を立つ旅人、此の宿にこそとまりけるが、今は打過ぐるたぐひのみ多くして、家居もまばらになり行くなど聞くこそ、變り行く世の習ひ、飛鳥の川の淵瀬には限らざりけめと覺ゆ。



武佐寺  
蒲生郡武佐村にあり、本名長光寺。  
 同上郡鳥籠村。同名の山あり。  
 遺愛寺  
遺愛寺鐘欲枕、枕、(白樂天)聽。

不破の關屋  
岐阜縣不破郡關原村字松尾の大木戸坂にあつた。

後京極攝政殿  
藤原良經、從一位太政大臣、建永元年(一八六六)薨年三十八。荒れにし後は云云。  
 人住まぬ不破の關屋の板廂(新古今集)

行き暮れぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりにとまりぬ。まばらなるとこの秋風、夜ふくるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたる心地す。枕に近き鐘の聲、曉の空におとづれて、彼の遺愛寺の邊の草の庵の寐覺も、かくやありけん、と哀れなり。行く末遠き旅の空思ひつゞけられて、いといたく物悲し。

都出でて幾日もあらぬ今宵だに

かたしきわびぬ床の秋風

美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底におとづれ、山風松の梢にしぐれわたりて、日影も見えぬ木の下道、あはれに心細し。越え果てぬれば、不破の關屋なり。關屋の板廂年經にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の荒れにし後は、たゞ秋の風と詠ませたまへる歌思ひ出でられて、この上は風情もめぐらし難ければ、いやしき言の葉を残さんもなかゝに覺えて、此處をば空しく打過ぎぬ。

一三 秋と冬

四方太  
阪本氏、鳥取縣の人、大正六年歿、年四十五  
 淺茅  
柴碩文、奈良縣の人、司法官、明治十四年生  
 漱石  
夏目金之助、東京の人、大正五年歿、年五十  
 我鬼  
芥川龍之介、東京の人、昭和二年歿、年三十六  
 竹冷  
角田眞平、靜岡縣の人、大正八年歿、年六十四

古疊つめたき秋の晝寝かな	四方太
冬の蠅白ひく上をまはりけり	
秋の空に黄落を待つ銀杏かな	淺茅
いつのまに時雨れてゐたる坪の石	
朝寒の顔を揃へし机かな	漱石
鳥飛んで夕日に動く冬木かな	
竹林や夜寒のみちの右ひだり	我鬼
山茶花の苔こぼるゝ寒さかな	
朝顔や垣にからまる風の色	竹冷
鳥の踏む通天橋や朝の霜	



小波

巖谷季雄、東京の人、昭和十年歿、年六十六

松宇

伊藤半次郎、長野縣の人、安政六年生

醒雪

佐々政一、京都府の人、文學博士、大正六年歿、年四十六

臨風

笹川種郎、文學博士、東京の人、明治三年生

瓊音

沼波武夫、名古屋の人、昭和二年歿、年四十七

小波

松宇

醒雪

臨風

瓊音

沃野十里露萬斛の朝かな  
月落烏啼霜や天滿の橋の上  
燭剪つて見守る太刀や夜半の秋  
凧や浪の上なる佐渡が島  
影法師一つになりし夜寒かな  
繩のれん頭で分くる霜夜かな  
秋晴れに氷木高知りぬ神ながら  
時雨るゝや黄昏れて行く蓑と笠  
西瓜太郎躍り出でよと割つてけり  
推敲の再び炭をつぎ直す

### 一四 國際に用ゐられた茶の湯

堀本義明

將軍家侍醫

大博士

明治四十三年歿、年七十三

老醫堀本義明翁は醫術以外にいろ／＼な嗜みを有つて居た方でありました。劍術、柔術、能、狂言、和歌、狂歌、俳諧、坐禪、茶の湯など、皆一通り試みられたさうですが、その中でも人も許し自らも許されたのは茶の湯道でありました。翁は曾て、「何でも、人様に勝つといふ事は、とても出来ませんが、負けはしまいと思ふのはお茶だけです。」といふ事を云はれたことがあります。そして、「自分の茶は唯だ一つの流儀を習つただけでなく、殆んどすべての流儀を習つたものですから、それが大層修行になつたやうに思ひます。」といふやうな事を云はれたこともあります。



グラント將軍  
(1822-85)  
南北戦争の時北  
軍の將となり、  
後第十八代大統  
領となる。

朝野の歡迎。



軍將 トンラグ

翁の茶の湯について思ひ出すのは、翁がグラント將軍をもてなされた時の光景であります。明治十二年にアメリカ合衆國の前大統領グラント將軍が來朝されました。其の時に於ける我が朝野の歡迎はえらいものであります。したが、連日連夜の數多き盛大な歡迎會の中で、趣味の上から最も將軍の心を惹いたものは、翁の主宰された茶の湯式の歡迎會であつたといふことです。

翁は岩倉右府の懇請によつて、或方面の宴會を主宰されることになりました。之れについては、他の人の話をも翁自身の話をも聞いたことがあります。私は面倒くさい、西洋人の御馳走役など厭だと言ひましたけれど、

岩倉右府  
右大臣岩倉具視  
大勳位公爵  
明治十六年薨  
年五十九  
岩倉右府の懇請  
によつて宴會を  
主宰された。

ども、岩倉さんが是非にと云はれるので、それでは一切私に御任せ下さい。」と云つて、到頭引き受けることになりました。是れまでは毎日毎夜西洋眞似の下手料理を食はせられて、飽き果てゝゐたところへ、とにかく新らしい獻立であつたものですから、大層喜びましたよ。まづお茶を出す時ですが、御菓子も趣向して、特別に源氏豆を作らせましてね。普通の紅白の外に紫を一種加へて、大きな鉢に入れて、私が將軍の前に持つて行きました。すると將軍がげげんな顔をして、「何だ？」と聞くでせう。そこで、これは源氏豆と云つて炒豆に砂糖の衣をかけたものであるが、今度は特に貴國と將軍とを壽ぐために作つたのである。此の大豆の粒々は貴國の國旗の星を象つたので、紅、白、紫の三色は御國の旗の筋の色を現はしたのであります。どうぞこれで日本國民の微意を諒せられるやうにと云ひますと、將軍はあの髭面

微意を諒とす  
る。

げげんな顔をし  
て「何だ？」と  
聞くでせう。



に皺をよせてニコ／＼喜びましてね、それは有難い、有難い。」と禮を云ひましたよ。それからいよ／＼お茶を出す時になつて、普通の熱いのは西洋人に飲めませんから、少しぬるくして將軍の



勿々



堀本義明筆蹟印鑑

前に持つて行きますと、コ  
ーヒを飲むやうな手附を  
して、直ぐに飲まうとしま  
した。それから、私は、お待  
ちなさい、茶には茶の飲み  
方がありますから。」と云つ  
て、簡単に式を教へますと、  
立派に教はつた通りにして、あとで挨拶の中に、私は世界を漫遊  
して斯様な宴會に臨んだ事が數知れずあるが、かやうな席で人  
に物教へをされたといふは、今日が始めてである。しかし私は

之れを恥と思はないのみならず、むしろ大いなる名譽と思つて  
居る。」といふやうな事を申しましてね、非常に満足して歸りまし  
た。そして歸ると、すぐに祕書官をよこして、先刻の御菓子を頂  
戴したいと云つて持つて行きましたが、荷に造つてみんな本國  
に送つたと云ふことです。その後また將軍に逢つて茶の湯の  
奥儀の話をしましたら、西洋の宴會の精神とそつくりだと云つ  
て、大層喜びましてね、向うに歸つてから鄭重な禮狀をくれまし  
たよ。」

翁はいつか其の禮狀を捜し出して見せると云つて居られまし  
たが、遂にそのまゝになつて了ひました。

翁が物を書かれた時に用ゐられる冠帽の一つに、「賜茶道進司」と  
刻つたのがありますが、それはグラント將軍を饗もてなされた時に、明治  
天皇から頂戴された雅號を記念されたものであります。（『野草集』）



# 一五 柔術

小泉八雲  
(1860-1894)

英國の歸化人  
詩人、文學者  
中學校、高等學  
校、帝國大學、  
早稻田大學の教  
師となる。  
明治三十七年歿

## 門外漢

一群の學生が堅  
睡を呑んで控へ  
てゐる。

柔術は昔の日本武士の護身の嗜みて、武器を持たずに戦ふ術である。門外漢には一寸角力のやうにも見える。試みに柔術が始まつて居る時に、其の道場へ行つて見るがよい。體の撓なやかな青年が二人づつ一組になつて、十人、十二人、素手素足で畳の上に揉み合つてゐる周圍に、一群の學生が堅睡を呑んで控へてゐるのが目に入るであらう。彼等は静まりかへつて、誰れ一人人口を利く者がない、喝采をする者もない。

此の靜肅の態度が柔術の道場の大切な規約の一つで、此處に入ると、水を打つたやうな光景が先づ著しく人の心を牽くのである。柔術は遊戯ではない。眞劍になると、西洋の拳闘家などが一寸

小泉 八雲

見て臆測するよりもはるかに危険である。爰に居る教師は、見たところは弱さうだが、普通の西洋の拳闘家を倒す位は何でもない。柔術は人に見せる技術ではなくして、自衛の術であり、また一種の



小泉八雲

戰闘術である。此の術の心得のない者が柔術家にかゝつたら、手もなく投げられてしまふ。まづ一種の秘術で、外部からは見えぬやうに腕を抜く、關節をはづす、髓を弛める、骨を折る。彼れは力士

以上である、否、寧ろ一種の解剖學者である。彼れはまた電光石火的に人を殺す術を知つて居る。だが、これには非常に堅い誓約があつて、滅多に其の手を出されぬことになつて居る。此の術は特

彼れは電光石火  
的に人を殺す術  
を知つて居る。



道心の堅固な人。

蓋し柔術とは、柔によつて剛を制するといふ意味なのである。

別傳授で、品行の正しい道心の堅固な人でなければ授けられぬ。こゝに忘れてならぬ事は、柔術家は決して自分の力にたよらぬので、非常な場合の外は自分の力を使はぬといふことである。それでは何を使ふかといふと、唯だ敵の力を使ふ。敵を倒すに敵の力を用ゐる。だから敵の力が大いなければ大いなる程、敵には不利で、我れには利である。余が或柔術の大家に會つた時に、非常に強さうな一人の青年が居た。余はこれが定めし弟子の中で一番えらいのであらうと思つて、聞いて見ると大違ひ、これが一番教へるに骨が折れると云つたので、驚いて何故かと聞くと、自分の腕力をあてにするからだ。といふ答であつた。蓋し、柔術とは、柔によつて剛を制するといふ意味なのである。

無類な東洋思想の中にあるのである。西洋人の頭脳では、此のやうな不思議な技は考へ出せぬ。力を以て力に對せず、たゞ攻めて來る敵の力を利用して、敵の力で敵を倒し、敵の働きて敵を制するといふ離れ業は、決して西洋人の工夫の中から出て來ることではない。西洋の思想は直線的に働くが、東洋のは曲線的である。柔術は單に防禦の學問ではなくして、一種の哲學である、一種の經濟學である、否々一種の修身法といつてもよい。これは空言ではない、柔術教育の大部分は、事實、純然たる徳育である。

日本人は萬事柔術の寸法で行く。彼等はフランス、ドイツの長所を採つて軍制を定めた。英佛の海軍を模範として立派な海軍を興した。佛蘭西人の監督の下に造船所を營み、支那、朝鮮、マニラ、メキシコ、印度、其の他の地方へ其の産物を輸出するために多くの汽船を備へつけた。軍事上、商業上の目的で五千餘哩の鐵道を布

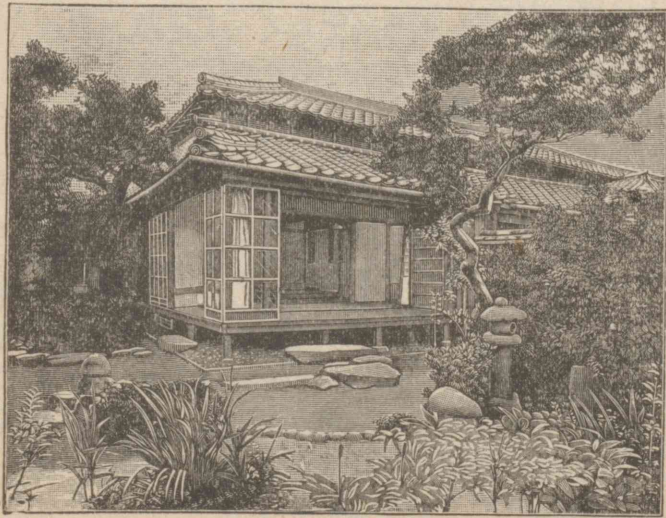
西洋の思想は直線的に働くが、東洋のは曲線的である。



合衆國に劣らぬ  
手練を示してゐ  
る。

いた。英米人の力を借りて、郵便電信の制度を立てた。其の燈臺は兩半球の海岸の中で一番明るいと言はれる。信號の運用も合衆國に劣らぬ手練を示して居る。電話や電燈もアメリカから持つて來た。學校の制度は獨佛米のを参照して立派に自家の組織を立てた。始めて鑛山、鐵道、其の他一般の工場に機械を据ゑ付けた當時は盛んに外人を傭つたが、今ではもうそれを廢めにかゝつて居る。

一言にして蔽へば、日本人は我々の工業や、應用科學や、經濟



小泉八雲舊宅

日本人は、もはや外國の學術を悉皆自分のものにして、しかと手の中に握つてゐる。

自己を持して、極度まで敵の力を利用する。

上、法律上諸の經驗の中から、使へさうなものを選び取りに取つて使つて居るのである。使ふといつても、決して模倣的には採らずして、其の力を伸ばす足になるやうなものだけを探り上げて居るのである。日本人は、もはやあらゆる外國の學術を棄て、も殆んど困らぬと云ふ所まで行つた。それらをばもう悉皆自分のものにして、しかと手の中に握つて居る。しかし衣食住と宗教とだけは西洋のを採らなかつた。そのわけは外でない。それらのもの殊に宗教を取り入れると、却つて其の力を殺ぐやうな事になるからである。其の鐵道と汽船と、電信と電話と、郵便事務と運送事業と、鋼鐵砲と旋條銃と、大學校と専門學校と、これら新式の事物が續おこつたに拘らず、日本は今猶ほ依然として千年の舊態を存して居る。彼れは、自己を持して、極度まで敵の力を利用する道を得て居る。彼れは比類なき自己防禦の組織、驚くべき國民固有の



柔術によつて、自己を保護しつゝあるのである。

(『東から』に據る)

### 一六 木曾殿の最期

(平家物語)

木曾  
義仲  
 源義賢の子  
 壽永三年戦死  
 年三十一

長坂  
山城の愛宕郡小  
 野郷を経て丹波  
 へ通ずる坂路。

龍華越  
山城愛宕郡大原  
 より近江國和通  
 郡龍華へ通ずる  
 道。

木曾は長坂を経て丹波路へとも聞ゆ。龍華越にかゝつて、また北國へとも聞こえけり。かゝりしかども今井が行方のおぼつかなきに、取つて返して、勢多の方へぞ落ち行きたまふ。今井、四郎兼平も、八百餘騎にて勢多を固めたりけるが、五十騎ばかりに討ちなされ、旗をば捲かせて持たせつゝ、主しゅのゆくへのおぼつかなきに、都の方へ上るほどに、大津の打出の濱にて、木曾殿に行きあひ奉る。中一町ばかりより互にそれと見知つて、主従駒を早めて寄り合うたり。

木曾殿、今井が手を取つてのたまひけるは、義仲六條河原にてい

かにもなるべかりしかども、汝がゆくへのおぼつかなきに、多くの敵かたきに後ろを見せて、これまで遁れたるはいかに。とのたまへば、今井、四郎、御誼まことにかたじけなう候。兼平も勢多にて討死仕るべし候ひしかども、御ゆくへのおぼつかなきに、これまで遁れ參つて候と申しければ、木曾殿、さては契りは未だ朽ちせざりけり。義仲が勢山林に馳せ散つて、この邊にも控へたるらんど。汝が旗上げさせよとのたまへば、捲いて持たせたる今井が旗さし上げたり。これを見つけて、京より落つる勢ともなく、また勢多より參る者ともなく、馳せ集まつて、程なく三百騎ばかりになり給ひぬ。

木曾殿なのめならずむぎのどのに喜うで、この勢にては最後の軍一軍いっぐんなどかせざるべき。あれにしぐろうて見ゆるは誰が手やらん。甲斐の一條次郎殿の御手とこそ承つて候へ。勢はいかほどあるらん。六千餘騎と聞こえ候。さては互によい敵かたき、同じう死ぬるとも、大勢

木曾殿なのめ  
 ならずむぎのどのに喜う  
 で、この勢にて  
 は最後の軍一軍  
 などかせざるべ  
 き。あれにしぐ  
 ろうて見ゆるは  
 誰が手やらん。



「甲斐の一條次郎殿の御手とこそ承つて候へ。」  
「勢はいかほどあるらん。」  
「六千餘騎と聞こえ候。」  
「さては互によい敵、同じう死ぬるとも、大勢の中にかへ入り、よい敵に逢うてこそ討死をもせめ」とてまつ先きにぞ進み給ふ。

の中にかへ入り、よい敵たきに逢うてこそ討死をもせめ」とて、眞先きにぞ進み給ふ。

木曾殿その日の装束には、赤地の錦の直垂に、唐綾緘の鎧着て、いかもの作りの太刀を佩き、鍬形打つたる兜の緒をしめ、二十四さいたる石打の矢の、その日の軍に射て、少々残つたるを頭高に負ひなし、滋籐の弓の眞中取つて、聞こゆる木曾の鬼葦毛といふ馬に、金覆輪の鞍を置いて乗つたりけるが、鎧ふんばり立ち上がり、大音聲をあげて、日頃は聞きけんものを、木曾の冠者、今は見るらん、左馬の頭兼伊豫の守朝日の將軍源義仲ぞや。甲斐の一條次郎とこそ聞け。義仲討つて兵衛佐に見せよや」とて、喚よびいて駈く。

一條次郎これを聞いて、只今名乗るは大將軍ぞや。餘すな者ども、漏らすな若黨、討てや」とて、大勢の中に取りこめて、われ討ち取らんとぞ進みける。木曾三百餘騎、六千餘騎が中へかけ入り、豎たてさま、

そこを破つて行く程に、土肥次郎實平、二千餘騎で支へたり。そこをも破つて行く程に、あそこにては四五百騎、こゝにては二三百騎、百四五十騎、百騎ばかりが中を、かけわりかけわり行く程に、主従五騎にぞなりにける。

日頃は何とも覺えぬ鎧が今日は重うなつたるぞや。

兼平一騎をば餘の武者千騎と思召し候ふべし。

横さま、蜘蛛手、十文字にかけ破つて、後ろへつと出でたれば、五十騎ばかりになりけり。そこを破つて行く程に、土肥次郎實平、二千餘騎で支へたり。そこをも破つて行く程に、あそこにては四五百騎、こゝにては二三百騎、百四五十騎、百騎ばかりが中を、かけわりかけわり行く程に、主従五騎にぞなりにける。五騎が中までも巴は討たれざりしが、その後物具脱ぎ捨て、東國の方へぞ落ち行きける。手塚太郎討死す。手塚、別當落ちにけり。

木曾殿、今井四郎、たゞ主従二騎になつてのたまひけるは、日頃は何とも覺えぬ鎧が、今日は重うなつたるぞや」とのたまへば、今井四郎申しけるは、御身も未だ疲れさせ給ひ候はず、御馬も弱り候はず、何によつて一領の御きせながを、俄に重うは思召され候べき。それは御方みかたにつゞく勢が候はねば、臆病でこそ、さは思召し候ふらめ。兼平一騎をば餘の武者千騎と思召し候ふべし。こゝに射残した



る矢七つ八つ候へば、暫らく防矢仕り候はん。あれに見え候ふは、栗津の松原と申し候。君はあの松の中へ入らせ給ひて、靜かに御自害候へ」とて、打つて行く程に、また新手の武者五十騎ばかり出て来る。

義仲六條河原にて、いかにもなるべかりしかども、汝と一所でいかにもなりなむ爲めにこそ、多くの敵に後ろを見せて、これまで逃れたんなれ。所々で討たれむより、一所でこそ討死をもせめ。

兼平は、この御敵、暫らく防ぎ參らせ候ふべし。君はあの松の中へ入らせ給へ」と申しければ、義仲六條河原にて、いかにもなるべかりしかども、汝と一所でいかにもなりなん爲めにこそ、多くの敵に後ろを見せて、これまで逃れたんなれ。所々で討たれんより、一所でこそ討死をもせめ」とて、馬の鼻を並べて、既に懸けんとし給へば、今井、四郎急ぎ馬より飛んで下り、主の馬の水づきに取りつき、涙をはらくと流いて、弓矢取は年頃日頃、いかなる高名候へども、最期に不覺しぬれば、長き瑕にて候ふなり。御身も勞れさせ給ひ候ひぬ。御馬も弱つて候。いふ甲斐なき人の郎等に組み落されて、討

さしも日本國に鬼神と聞こえさせ給ひつる木曾殿。

たれさせ給ひ候ひなば、さしも日本國に鬼神と聞こえさせ給ひつる木曾殿をば、何某が郎等の手にかけて、討ち奉りたりなんど申されんこと、口惜しかるべし。たゞ理をまげて、あの松の中へ入らせ給へ」と申しければ、木曾殿さらばとて、たゞ一騎、栗津の松原へぞ駆け給ふ。

今井、四郎取つて返し、五十騎ばかりが勢の中へかけ入り、鏝ふんばり立ち上り、大音聲をあげて、遠からん者は音にも聞け、近からん人は目にも見給へ。木曾殿の乳母子に、今井、四郎兼平とて、生年十三にまかりなる。さる者ありとは、鎌倉殿までも知ろしめされたるらんぞ。兼平討つて兵衛、佐殿の御見參に入れよや」とて、射残したる八筋の矢を、さしつめ引きつめ、さんぐに射る。死生は知らず、矢庭に敵八騎射落し、その後太刀を抜いて切つてまはるに、面をあはする者ぞなき。たゞ、射取れや、射取れとて、さしつめ引きつ



めさんぐに射けれども、鎧よければ裏かゝず、明間を射ねば手も負はず。

木曾殿はたゞ一騎、粟津の松原へ駆け給ふ。頃は正月二十一日、入相ばかりのことなるに、薄氷は張つたりけり、深田ありとも知らずして、馬をさつと打ち入れたれば、馬の頭も見えざりけり。あふれどもあふれども、打てども打てども動かず。かゝりしかども、今井が行くへのおぼつかなさきに、ふり仰き給ふ所を、相模の國の住人、三浦の石田次郎爲久追つかゝり、よつびいてひやうと放つ。木曾殿内兜を射させ、痛手なれば兜の眞甲を馬の頭におし當て、うつぶし給ふ所を、石田次郎爲久が討ち奉るぞや」と名乗りければ、今井、四郎は軍し

木曾殿内兜を射させ、いた手なれば兜の眞甲を馬の頭におし當て、うつぶし給ふ所を、石田次郎爲久二人落ちあひて、既に御首をば賜はりけり。

けるが、これを聞いて、今は誰れをかばはんとて軍をばすべき。これ見給へ東國の殿ばら、日本一の剛の者の自害する手本よ」とて、太刀のきつさきを口に含み、馬より逆さまに飛び落ち、貫かつてぞ失せにける。

### 一七 我が手紙観

著述は演説のやうなものである。手紙は對話のやうなものである。親展極秘の手紙は親友間の秘密話のやうなものである。

人は心である。心を詞にあらはし、紙に寫して、或人に宛てたものが手紙である。手紙はアドレスである、←である、特別なる人の心と心とを繋ぐ橋掛りである。



人の云爲行藏。  
手紙は人の生活  
そのものの寫し  
で、人生の最も  
眞面目なる一部  
分である。

はるか云々  
西行の歌  
沈黙は金である

人の云爲行藏は、之れを封じて宛名を書けば、悉く手紙となるべきものである。手紙は人の生活そのものの寫して、人生の最も眞面目なる一部分である。

「はるかなる岩のはざまにひとりゐて、人目おもはで物おもはばや。」沈黙は金である。世に無言、自足、自照、凝念の意味深きに比ぶべきものがない。此の一念を特に或る一人に示したものが手紙である。衆人の前に公開したものが、著述であり、演説である。

人の心は、之れを示す相手が多くなり、場所が廣くなるに従つて、その香氣がますます稀薄になり、其の風姿がますます餘所行きになつて來る。

感情が高まれば、詞の調子が低くなる。手紙の文は<sup>かみし</sup>袷を着るほど命がなくなり、文字選みをするほど力がなくなる。

直接に話せば面白いが、手紙を見ては一向面白くない人がある。是れは、其の人の心が突發的、火花的、斷片的、兎糞的に發露するに適した人である。直接に話しては一向面白くないが、手紙を見るとたまらなく床しい人がある。これは、其の人の心が、冥想し、整理して組織的に表現さるゝに適した人である。

金鐵の交り。  
冥想し、整理し  
て組織的に表現  
するに適した人

直接に話して面白く、手紙を見て更に床しくなる人の交りは金鐵である。が、是れは百に一つもない。手紙や著述で慕つた夢の、直話に醒める、是れが世の中である。



或る老醫は、人から手紙を貰ふ毎に、それをば一々差出した當人の來訪と見做して、すぐに讀んで返書を認めた。もし先づ郵便が來て、つゞいて來客があれば、郵便の方を先客と見做し、御客を待たせておいて、先づ手紙の方から見て、それに對する禮を盡くしたといふ事である。有難い心掛である。

創作には雕心鏤骨の苦勞を惜まず、手紙は當座しのぎのごまかしで間に合はせる。

詩歌小説などの創作をする事と、手紙を書く事との間に、何等輕重の差別をおくべき筈のものではない。相手を重んじ、想を重んずる限り、手紙に對しても、文學的創作同様に表現の苦心を要する筈で、創作には雕心鏤骨の苦勞を惜まず、手紙は當座しのぎのごまかしで間に合はせるといふのは、相手を輕んじ、自分の誠意を輕んずるものである。

「おとづれ」「たより」「手紙」「玉章」「水莖」。書翰といふ事をあらはす世界の諸國の言葉の中で、我が國のが取りわけ優しく、意味深く、情<sup>なさけ</sup>しいのがうれしい。  
(「水莖」)

### 一八 九十九里濱

伊藤 左千夫

九十九里の磯のたひらは天地の四方の寄合に雲  
たむろせり

ひさかたの天の八隅に雲しづみわが居る磯に舟  
かへり來る

伊藤左千夫  
千葉縣成東町に  
生る。正岡子規  
の門人。その後  
「馬酔木」「ア  
ララギ」を創刊  
大正二年歿  
年五十  
九十九里濱  
千葉縣の海岸。



ひむがしの沖の薄雲いり日うけ下邊の朱あかに海暮  
れかへる

わたつみの磯の廣らに三人居り八隅暮れゆく海  
を見るかも

をさなきを二人つれ立ち月草の磯邊をくれば雲  
夕焼す

人の住む國邊を出でて白波が大地よた兩分わかけしはて  
に來にけり

天雲のおほへる下の陸つちひろら海廣らなる涯はたに立

つ吾は

天地の四方の寄合を垣にせる九十九里の濱に玉  
拾ひをり

白波やいや遠白に天雲に末邊こもれり日もかす  
みつゝ

高山も低山もなき地の果は見る目の前に天し垂  
れたり

春の海の西日に霧きらふ遙かにし虎見が崎は雲と  
なびけり



白雲もゆふやけ雲も暮れ色にいろ消えゆくも日は入りぬらし

砂原と空と寄り合ふ九十九里の磯行く人ら蟻のごとしも

〔左千夫歌集〕

### 一九 大佛殿の柱くゞり

十返舎一九

十返舎一九  
江戸時代の戯作者  
本名重田貞一  
天保二年歿  
年五十七  
毘盧舎那佛  
大日如来  
法施し奉る。

大佛殿方廣寺、本尊は毘盧舎那佛の坐像、御丈六丈三尺、堂は西向きにして東西二十七間、南北は四十五間あり。彌次郎兵衛北八ここに法施し奉りて、彌ナント話に聞いたよりか、がうてきなもんぢ

やあねえか。アノかうしてござるお手のひらへ、疊が八疊しける



十返舎一九

ナニ、鯨ぢやあ  
るめえし。  
ホンニこいつは  
奇妙々々。

の柱の許にはちやうど人のくゞるだけ切り抜きし穴あり。田舎道者ども戯れにくゞりぬける。北八も同じくくゞり、北「コリヤ面白え。おいらはくゞれるが、彌次さんは肥つてゐるからぬけられめえ。」彌「おれだとしてナニこれが」と四這になつて、柱の穴へ半分



コリヤひよんな  
事をした。

程入りかけたが、一向にぬけられず、あとへ戻らうとするに、脇差の  
 鍔が横腹につかへて、痛みこらへられず。彌次郎顔を眞赤になし、  
 「アイタ、。コリヤひよんな事をした。」北「オヤ、どうした。ぬけ  
 られねえか。」彌「これ手を引つばつてくりや。」北「ハハ、。こい  
 つはをかしい。」と、彌次郎の両手をぐつと引つばる。彌「アイタ、。  
 北「弱え男だ。ちつと辛抱すればい。」彌「あの方から足を引い  
 てくれる。」北「承知々々。」と、うしろへ廻り、兩の足を捕へ、  
 ヤアえんさア〜。彌「あいた〜。」北「ちつと堪へなせえ。よつほど出かけ  
 たやうだ。ヤアえんさア〜。」彌「ア、待つてくれ待つてくれ。  
 腰骨が折れるやうだ。コリヤやつぱり前の方から引き出してく  
 れ。」といふ故、北八又前へ廻り、兩手を捕へて引く。北「ヤアえんさア  
 〜。」ソレ又こつちへよつほど出て來た。彌「コリヤたまらぬ。  
 アイタ、。北八これではいかぬ。初手のやうに又あとへ

コリヤい、算段  
がある。

兩方から引つば  
つては出る瀬が  
ねえ。

引き戻してくれ。」北「エ、いろ〜  
 なことをいふと、又後ろから足を捕  
 へ、ヤアえんさア〜。」彌「待つて待て  
 待て。コリヤどうでも前の方から  
 引いてもらはう。」北「エ、そんなに  
 前へ廻つたり後ろへ廻つたり、引き  
 出しては引き戻し、いつまでも果て  
 しがねえ。コリヤい、算段がある。  
 と、そばに見てゐたりし參詣の人を  
 頼みて、北「モシ、どうぞこつちからお  
 めえ引張つて下さいませ。わしが  
 あつちへ廻つて、足を引きずり出し  
 ますから。」彌「ばかアいふな。兩方から引つばつては出る瀬がね

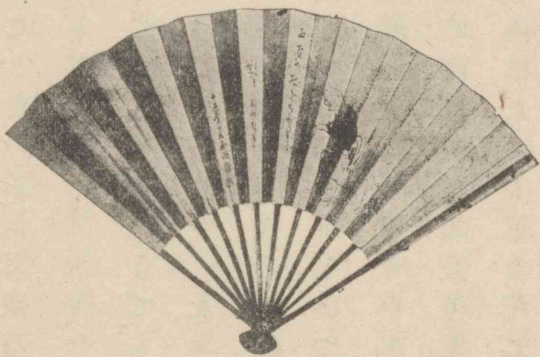


こはれは長の大佛の柱拔け



酔を一升も買つて来て、彌次さん、おめえに飲ませよう。

そないな事いうたてて。



十返舎一 九戲書扇

え。北「出る瀬がなくても、両方から引張ると、前へ廻つたり、後ろへ廻つたりする世話がなくていいわな。」參詣の人「イヤ、両方からあさんの體かたを引き伸ばしたら、ツイ出られさうなもんぢやあろぞい。」北「コリヤいゝ事がある。酔を一升も買つて来て、彌次さん、おめえに飲ませよう。」彌「なぜ。酔を飲むとどうする。」北「ハテ酔を飲むと瘦せるといふことだから。」參詣の人「ハ、ハ、ハ、そないな事いうたてて、いんまの間に合ふことぢやないさかい、かうさんせ。どこぞへいて槌借つて來さんして、頭くちかぶを後あとの方へ打込ましたがよいわいの。」北「なるほど、こいつが早い理窟だ。しかしそれでは命があるめえ。」

されば、そこは  
どうも請合はれ  
んわいの。

エ、いめえま  
しい事をいふ。

脇差の鍔が横腹  
へこだはつて、  
いてえのだ。

參詣「されば、そこはどうも請合はれんわいの。コリヤ、わしが智慧貸そわいの。何ぢやろと、あの子のからだを和やわかにして、引き出すがよかるさかい、かうさんせ。土砂どじやとて來てかけさんせい。」田舎者「すんだら土砂のウぶつかげずと、一番の桶はちさア買つてきなさろ。手足をちとべし、をん曲まげたら入るべいのし。」彌「エ、いめえましい事をいふ。むだどころぢやアねえ。北八、早くどうぞしてくれぬか。」北「待ちなよ。ハ、アおめえ脇差の鍔が横腹よこはらへこだはつて、いてえのだ。」と、手を差入れてひねくり廻し、やうく脇差をぬいて取る。彌「いかさま、これでどうか寛くわんぎがあるやうだ。」北「ドレドレ、イヤ、時にどなたぞ前の方から押し下さいませ。わしが足を持つてこつちへ引き出しますから。やあえんさア。」參詣「それ出るわいの。まちつとぢや、いけません。」彌「ア、ウ、ア、いてえ。」北「しめたぞ。えんやア。」ソリヤ出たぞ。」と、



生むよりか生まれる身の方がよつぽどせつねえ。

蓮華王院  
大佛の南、蓮華王院は寺の名、本堂は三十三間堂  
長寛三年創建

やうくの事にて引き出せば、彌次郎は大汗をふきく、ほつと溜息つきながら、ヤレくありがてえ。コリヤどなたも御苦勞でございやした。あゝく、生むよりか生まれる身の方がよつぽどせつねえ。コレ、着物がすり切れて、あばら骨が今にびりくする。傘さして出るお鼻よりはしらなる

あなおそろしや身をすほめても

かく詠み興じて大笑となり、それより御境内をめぐり、蓮華王院の三十三間堂にて、

いやたかに五重の塔にくらべ見ん

三十三間堂のながさを

(『東海道中膝栗毛』)

橋千蔭

國學者  
通稱加藤又左衛門、號は芳宜園、耳梨山人、江翁、文化五年(二四六八)歿、年七十四

久かたの天の橋立。  
常磐なる松が浦島

ますらをのところが

山田の曾富騰  
やりてむ

### 二〇 繪の山水

橋 千 蔭

文机によりゐつゝ、程なき壺の中の草木をのみあはれみて、思ひ足らはせるにしもあらず。名ぐはしき吉野の山の奥をとめ、久かたの天の橋立をたづね、常磐なる松が浦島にわたりてぞ、心ゆく限なるべきを、遠く出で立たむもいたつがはしくものうければ、いぶせき庵のうちに籠らひ居るよ、ますらをのところがなすとやいはむ。そもまた己がさがなればいかゞはせまし。いでや山田の曾富騰といへる神の、足行かずして、千里の外まで、心を放ちやりてむわざもがなと思ひめぐらして、山と水とのすがたを壁にゑがかせて、心をしづめて打對ふに、岩かねのこゝしき嶺より漲りおつる瀧つ瀬あり。かたへの峰岫より横ぎりわたる白



聞きつべく  
末つ方

(谷靜庵開山鳥  
語梯) 危斜踏  
猿聲わびしらに  
ましらな鳴きそ  
足引の山のかひ  
ある今日にやは  
あらぬ (和養朗  
詠集)

手束杖

訪ふな、めり

雲になかば絶えて、麓におち来るは、その響聞きつべく、そが末つ方  
は道の面に造り出せる檜皮屋のもとまで流れたり。簾高く巻き  
て、三人四人思ふ事なげに語らふさまを見れば、我もその人々にま

危斜踏  
王御  
あまのこ  
あまのこ

橋 千 藤 蹟 筆

じらひ居る心地す。木高き  
松の日かげ生ひたれて、梢に  
はましら群れあつゝ、木の實  
とりはむなどもをかしきや。  
つゞら折なる山路を、手束杖

曳きてのぼり行く人あり。童子琴をいだきて随へり。いづこへ  
行くならむと見れば、山のなからばかりの平らかなるに、黒木もて  
あづまや造りて、ひとり笛吹きすさべる人のもとをさして訪ふな  
めり。遙かに木立ちちけぶれるひまゝに小き家居見えて、細き  
棚橋わたしたるを、駒に乗りて行くあれば、水際の蘆間に、小舟浮か

べてさでさしおろし、あるは釣垂るるなども見ゆ。朝な夕なこそ  
見れど飽かれぬあまりに、かの瀧のもととなる人の心をよみける、  
心さへ澄みわたりけりとこしへに  
みなぎる瀧の音になれつゝ  
笛吹きみたる奥山人の心を、

わが山の松の嵐よ世の中に

笛の音をだに誘はずもがな

「うけらが花」

### 二一 音に聞こゆる爲朝

(保元物語)

新院は齋院の御所より北殿へ遷らせ給ふ。左府は車にてまゐ  
り給ふ。白河殿より北河原より東春日の末にありければ、北殿と  
ぞ申しける。南の大炊御門表に、東西に門二つあり。東の門をば

爲朝

源爲義の第八子  
嘉應二年大島に  
て自殺

年三十二

新院

崇徳上皇

左府

左大臣藤原頼長

保元元年敗死

年三十七



爲義

義朝の父  
保元元年死  
年六十二

義朝

平治元年平治の  
亂に敗死す。  
年三十八

爰に鎮西八郎爲  
朝は、我れは親  
にも連れまじ、  
兄にも具すまじ  
高名不覺も紛れ  
ぬ様に、唯だ一  
人如何にも強か  
らん方へ差向け  
給へ。縱令千騎  
もあれ、萬騎も  
あれ、一方は射  
拂はんずるなり  
とぞ申しける。

大力の強弓、矢  
次早の手きゝな  
り。

平馬助忠正承つて、父子五人並びに多田藏人大夫頼憲都合二百餘  
騎にて固めたり。西の門をば六條判官爲義承つて、父子六人して  
固めたり。其の勢百騎許りには過ぎざりけり。是れこそ猛勢な  
るべきが、嫡子義朝に付きて、多分は内裏へ参りけり。爰に鎮西八  
郎爲朝は、我れは親にも連れまじ、兄にも具すまじ、高名不覺も紛れ  
ぬ様に、唯だ一人如何にも強からん方へ差向け給へ。縱令千騎も  
あれ、萬騎もあれ、一方は射拂はんずるなりとぞ申しける。依つて  
西河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば、左衛門大夫家  
弘承つて、子供具して固めたり。その勢百五十騎とぞ聞こえし。  
抑、爲朝一人として、殊更大事の門を固めたる事、武勇天下に許さ  
れし故なり。件の男、器量人に越え、心飽くまで剛にして、大力の強  
弓、矢次早の手きゝなり。弓手の肘、馬手に四寸伸びて、矢束を引く  
事世に越えたり。幼少より不敵にして、兄にも所をおかず、傍若無

香椎宮  
福岡縣糟屋郡香  
椎村、神功皇后  
を祀る。

人なりしかば、身にそへて都に置きなば悪しかりなんとて、父不孝  
して、十三の歳より鎮西の方へ追ひ下すに、豊後國に居住し、尾張權  
守家遠をめのととし、肥後國阿曾平四郎忠景が子に、三郎忠國が婿  
になつて、君よりも賜はらぬ九國の總追捕使と號して、筑紫を從へ  
んとしければ、菊池原田を始めとして、所々に城を構へて楯籠れば、  
その儀ならば、いで落して見せんとて、いまだ勢もつかざるに、忠國  
ばかりを案内者として、十三の歳の三月の末より十五の歳の十月  
まで、大事の軍をすること二十餘度、城を落すこと數十箇所なり。  
城を攻むる謀、敵を打つ術、人に勝れて、三年が内に九國を皆攻め落  
して、自ら總追捕使に押しなりて、悪行多かりけるにや、香椎宮の神  
人等、都に上り訴へ申す間、往にし久壽元年十一月二十六日、徳大寺  
中納言公能卿を上卿として、外記に仰せて宣旨を下さる。  
源爲朝、久住宰府、忽諸朝憲、咸背、綸言、梟惡、頻聞、狼藉尤甚、早可令禁



進其身、依宣旨執達如件。



(筆盛陸郷西)朝爲

上洛すべき由申しければ、大勢にて罷上らん事、上聞穩便ならずと

然れども爲朝猶ほ參  
洛せざりければ、同二年  
四月三日、父爲義を解官  
せられて、前檢非違使に  
なされけり。爲朝之れ  
を聞きて、親の科に當た  
り給ふらんこそあさま  
しけれ、其の儀ならば、我  
れこそ如何なる罪科に  
も行はれんずとて、急ぎ  
上りければ、國人どもも

親の科に當たり  
給ふらんこそあ  
さましけれ。

爲朝は七尺ばかりなる男の、目角二つきれたるが、紺地に色々の糸を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て威したる大荒目の鎧、同じく獅子の金物打つたるを着るまに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞆入れ、五人張の弓、長

て、形の如くに付き従ふ兵ばかり召具しけり。乳母子の箭前拂の須藤九郎家季、其の兄透間數の悪七別當、手取の與次、同與三郎、三町礫の紀平次大夫、大矢の新三郎、越矢の源太、松浦の二郎、左中次、吉田の兵衛、打手の紀八、高間の三郎、同四郎を始めとして、二十八騎道具したりける。依りて去年より在京したりしを、父不孝を赦して、今度の御大事に召具しけるなり。

爲朝は七尺ばかりなる男の、目角二つきれたるが、紺地に色々の糸を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て威したる大荒目の鎧、同じく獅子の金物打つたるを着るまに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞆入れ、五人張の弓、長さ七尺五寸にて、鉞打つたるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體、樊噲も斯くやと覺えて由々しかりき。謀は張良にも劣らず、されば堅陣を破る事、吳子孫子が難しと



さ七尺五寸にて  
銃打たるに、  
三十六差したる  
黒羽の矢負ひ、  
兜をば郎等に持  
たせて歩み出で  
たる體、樊噲も  
斯くやと覺えて  
由々しかりき。

晉に聞こゆる爲  
朝見んとてこそ  
り給ふ。

高松殿  
假内裏、後白河  
天皇の御所

主上の御方心に  
くも候はず。

清盛などがへろ  
へろ矢、何程の  
事か候べき。

する所を得、弓は養由をも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れ  
ずといふことなし。上皇を始めまゐらせて、あらゆる人々、晉に聞  
こゆる爲朝見んとてこそり給ふ。

左府即ち合戦の趣計らひ申せと宣ひければ、畏つて、爲朝久しく  
鎮西に居住仕つて、九國の者共従へ候ふに附きて、大小の合戦數を  
知らず。中にも折角の合戦二十餘箇度なり。或は敵に圍まれて  
強陣を破り、或は城を攻めて敵を亡ぼすにも、皆利を得る事夜討に  
如くこと侍らず。然れば只今高松殿に押し寄せ、三方に火を懸け、  
一方にて支へ候はんに、火を遁れん者は矢を免るべからず。矢を  
恐れん者は火を遁るべからず。主上の御方心にくも候はず。  
但し兄にて候ふ義朝などこそ懸け出でんずらめ、それも眞中差し  
て射通し候ひなん。まして清盛などがへろへろ矢、何程の事か候  
ふべき。鎧の袖にて拂ひ、蹴散らして捨てなん。行幸他所へなら

行幸を此の御所  
へ成し奉り、君  
を御位に即け進  
らせん事、掌を  
返す如くに候ふ  
べし。

富家殿  
頼長の父  
關白忠實

ば、御免を蒙つて、御供の者少々射んずる程ならば、定めて駕輿丁も  
御輿を捨て、逃げ去り候はんずらん。その時爲朝まゐり向ひ、行  
幸を此の御所へ成し奉り、君を御位に即け進らせん事、掌を返す如  
くに候ふべし。主上を迎へまゐらせん事、爲朝矢二つ三つ放さん  
ずるばかりにて、いまだ天の明けざらん前に勝負を決せん條、何の  
疑ひか候ふべきと、憚る所もなく申したりければ、左府、爲朝が申す  
様、以ての外の荒儀なり。年の若きが致す所か。夜討などいふ事  
汝等が同士軍、十騎二十騎の私事なり。畏けれど皇家の御爲めに、  
源平數を盡くして、兩方にありて勝負を決せんに、無下に然るべか  
らず。其の上南都の衆徒を召さるゝ事あり。興福寺の信實玄實  
等、吉野十津河の指矢三町、遠矢八町といふ者共を召具して、千餘騎  
にてまゐるが、今夜は宇治に着き、富家殿の見參に入り、曉是れへ參  
るべし。彼等を待ち調へて、合戦をば致すべし。又明日院司の公



卿殿上人を催さんに、參らざる者どもをば死罪に行ふべし。首を  
 刎ぬる事兩三人に及ばず、残りなどは參らざるべき」と仰せられ  
 ければ、爲朝上には承伏申して御前を罷り立ちてつぶやきけるは、  
 「和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬ事なれば、合戦の道をば武士  
 にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計らひ如何あらん。義朝  
 は武略の奥義を極めたる者なれば、さだめて今夜寄せんとぞ仕り  
 候ふらん。明日までも延びばこそ、吉野法師も奈良大衆も入るべ  
 けれ。只今押寄せて風上に火を懸けたらんには、戦ふともいかで  
 か利あらんや。敵勝に乗る程ならば誰れか一人安穩なるべき、口  
 惜しき事かな」とぞ申しける。

尾崎紅葉

明治の小説家

名は徳太郎

東京の人

明治三十六年歿

年三十七

### 二二 野州の山と越の海

尾崎紅葉

安からざる悒鬱  
を抱きて一五時  
間の獨りに倦み  
疲れつゝ。

天は潤く、地は  
退かに、たゞ平  
蕪迷ひ、斷雲飛  
ぶのみにして。

車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は改まれど、我れは安からざる悒鬱を抱きて、やる方なき五時間の獨りに倦み疲れつゝ、はじめて西



尾崎紅葉

那須野の驛に下車せり。

直ちに西北に向ひて、今なほ茫茫たる古の那須野が原に入れば、天は潤く、地は退かに、たゞ平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原はそこぞと見えて、行くほどに路は窮まらず。漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に到れば、人家の盡くるところに涼々の響きありて、これに架かれるを入勝橋となす。

橋を渡りて僅かに行けば、日光暗く、山厚く疊み、嵐氣冷やかに、谷



すはや、こゝに  
空山の雷、白光  
を放ちて崩れ落  
ちたるかとすさ  
まじかり。

道あれば水あ  
り、水あれば必  
ず橋あり、全溪  
にして三十橋。

深く陥りて、幾廻りせる葛折の、後ろには密樹に聲々の鳥啼き、前には幽草歩々の花を發く。愈、登れば、遙かに木がくれの音のみ聞こえし流れの、水上は浅く見えて、驚破や、こゝに空山の雷、白光を放ちて崩れ落ちたるかとすさまじかり。道の右は山を切りて長壁となし、石幽に蘚碧うして、幾筋ともなく白絲を亂しかけたる細瀧、小瀧の、珊々としてそゞげるは、嶺上の松の調べも定めてこの緒よりやと見捨てがたし。

車を驅りて白羽坂を越えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑をふみて、山中の景は始めて奇なり。これより行きて、道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全溪にして三十橋。山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五湯。なほ數ふれば、十二勝、十六名所、七不思議、誰れか一々探り得べき。

そも、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峯の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒川の流れにさかのぼる片岨にして、到るところ巉巖の水を夾まざるなきは、さながら青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。まづ大網の湯を過ぐれば、根本山魚止瀑、兒が淵、左鞞の嶮は古り



鹽原白雲洞附近

て、白雲洞は朗らかに、布瀑、龍が鼻、材木岩、五色岩、船岩など、と眺め行けば、鳥居、戸、前山の翠衣に染みて、福渡戸の里に入るなり。途すがら前面の



崖のところづくに、躑躅の咲き残り、山藤の懸かれるが、いと興ありと眼留めつゝ行くほどに、鹽釜の湯、離れ室、甘湯澤、兄弟瀧、玉簾瀨、小太郎が淵など打ち過ぎて、やがて路のほとりに高きは寺、山、低きは人家の在るところ、即ち畑下戸の里に着きぬ。

畑下戸は一村十二戸、温泉は五個所に湧きて、五軒の宿あり。ここに清琴樓と呼べるは、南にあたりて箒川の緩く廻れる磧に臨めり。俯すれば水石の粼々たるを弄ぶべく、仰げば西に富士、喜十六の翠巒重疊して、清風座に滿ち、袖の澤を落ち來る流れは、吉井瀑となり、二十丈の絶壁に懸かりて、素練を垂れたるかと思し。東北は山また山を重ねて、琅玕の玉簾深く夏日の畏るべきを遮りたれば、四面遊目に足りて丘壑の富を擅まにし、林泉のおごりを窮め、またあるまじき清福自在の別境なり。

我れはこの繪を見る如き清穩なる風景に逢ひて、かの途すがら

四面遊目に足りて丘壑の富を擅まにし、林泉のおごりを窮む。

嶮しき巖と激しき流れとの爲めに、幾度か魂飛び肉消えて理むる方もなくかき亂されし胸の中の、靄然として頓に和らぎ、恍然としてすべてを忘るゝを覺えたり。

まことに好くこそ我れは來つれ。何ぞ來たることの甚だ遅かりし。山の麗はしといふも、壤の堆きのみ、川の暢けしといふも水の逝くに過ぎざるを、牢として抜くべからざる我が半生の痼疾の、いかでか壤と水との醫すべきものならんと、齒牙にもかけず侮りたりし己れこそ、まづ侮らるべき愚かの者ならずや。

見よ見よ、木々の緑も、浮かべる雲も、秀づる嶺も、流るゝ溪も、そばだつ巖も、吹き來る風も、日の光も、雞の啼く音も、空の色も、皆おのづから浮世のものならで、我れはこゝに憂へを忘れ、悲みを忘れ、苦みを忘れ、勞れを忘れて、身はかの雲と軽く、心はこの水と淡し。希はくは、今よりかくの如くにして我が生を終へんかな。

身はかの雲と軽く、心はこの水と淡し。

〔續金色夜叉〕



渺々たる日本海  
は波に一船を着  
けず、雲に一鳥  
を帯びず。

## 二

九時三十五分に直江津を發つて、忽ち眼明らかなりと驚けば、渺渺たる日本海は、折しも波に一船を着けず、雲に一鳥を帯びずして、千萬頃の虚しく廣きに、たゞ池の如く靜かな潮が浩蕩として遊んで居るのであつた。と見ると、瑠璃の煙る様に、物あつて幽かに顯はれるのを、早くも「佐渡、佐渡」と案内する聲がする。先に香嶽樓の縁端に伸び上がつて、我が肩太し。と、天の一方に望んだ佐渡が島が、今、目を遮る物もあらぬ三十海里の波の上に、「温泉水滑洗凝脂」とやうに浮かび出たのである。美なるかなこの島の風情。凡そ眺めてかくも懐かしく、また譬へん方なく心動かされる遠景が、またと有るであらうか。直江津の古い「鹽たれ唄」とかいふに、

佐渡へ〜と草木も靡く、佐渡はゐよいか住みよいか。

とあるのを見ても、この景に對して心を動かさぬ者のないことが

知られる。またかの「來いと云たとて行かりよか佐渡へ」の如きは、苟も日本語を解するものの知らざるはなきまでに全國に轟いてゐる。そこが古の配處であつたとも知らず、今も小判になるものが出る所と知らぬ輩でも、波の上の行かれぬ處といふことは皆心得てゐる。それほどの口吟を思はずに、誰れか一人こゝが過ぎられよう。遙かに佐渡が見える。「四十九里」と直ちに胸に浮かぶ。同時にそれにしては近いやうだといふ疑ひが、また起こる。これには能登の輪島からの四十九里といふ説もあつて、とにかく越後の唄ではないに極つてゐる。佐渡の相川の人の話に、極々快晴のいはゆる日本晴れには、能登の珠洲崎が雲煙縹渺の間に、見るといへば見えるぐらゐに見えるとかいふことで、而してその人は一年の中にたゞ一度見たといふことである。此の歌に惆悵限りなき意の籠つて居るのも、此の邊の消息によるのであらう。

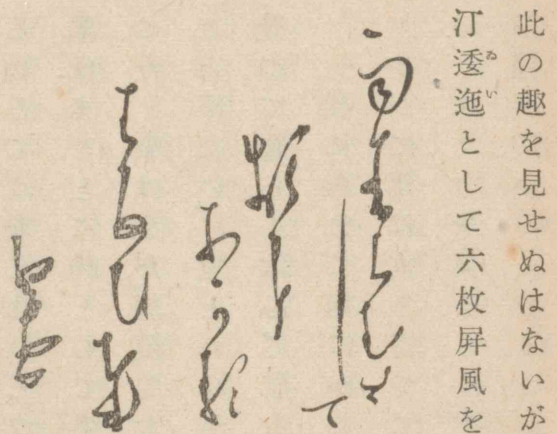


すべて一線のトンネルに貫いて、佛に逢へば佛を殺し、祖に逢へば祖を殺す。

抑、この海の雄渾と併せて、この島の秀麗を見るのは、北越鐵道線双快の一つで、其のもう一つは、更に進んで、鉢崎から柏崎に到るまで、米山峠の眞下を磯傳ひに疾驅しつゝ、八門のトンネルを出入する光景である。その趣は稍、東海道線が薩埵峠を過ぐるのに髣髴たるものであるが、それはたゞ皮相の類似で、彼れにあつては全くこれの氣魄を闕いて居る。道は荒波の磯邊であるから、一面に巖石突兀として、或ひは潮に臥し、或ひは草に蹲り、或ひは山に逆らつて待ち、或ひは水に臨んで仆るゝといふ有様で、その大いなるものにあつては、百歩にして崖と塞がり、二百歩にして巖鼻と突き出るのを、すべて一線のトンネルに貫いて、佛に逢へば佛を殺し、祖に逢へば祖を殺し、道に當たるものあれば、必ず突いて突いて、突き進んで行くのである。

凡そトンネル續きの線路は、碓氷であれ、箱根であれ、一つとして

雨來らむと  
して顔にあ  
がる花火か  
な  
紅葉



尾崎紅葉筆蹟

此の趣を見せぬはないが、別してこゝにその味はひがあるのは、長汀透迤として六枚屏風を疊むが如き曲節を盡くすが爲めて、甲のトンネルを出づれば直ちに乙のトンネルの全景が見え、乙を過ぐれば丙、丙が去れば丁と、彼等の争つて去來するのが、後から後からと一々目に入つて來る。しかも弓手に當たつては日本海の荒磯浪が鞞鞞と寄せては、鬨の聲を揚げ、馬手には峻嶺峨々として、當國無双の名高き米山峠が聳えて居ると思へば、殆んど快極つて肉躍るの感があつた。

新潟に着いた。一日夙く起きて海水浴に出掛けた。旭町の坂



を登ると、松林の涼しい丘に出る。そこに立ち續く人家を過ぎて、暫らくは、木の間よ、畑よ、叢よと迎る程に、丘の盡くる處に到ると、洋たる千里の潮が面を照らして、平沙遠く眼界を領する趣は、いかさま太古の荒漠を、そのまゝの光景である。天と浪と砂と、目に入る物としては唯だ此の三つがあるばかり、此の曉の雄大高渾なる氣象は、まことに神として崇ぶべく、景として弄ぶべきものではなかつた。余はまだ、規模の大いなることかくの如き海水浴場を見ることがない。見とれながら、小高い砂山の駱駝背状を成した頂に登つて、暫らく休んで居ると、恰も好し旭がうら／＼とさし昇る。

松にぬれて旭にかわく衣涼し

やがて渚に立ち寄つて其の衣を脱ぎ捨てた。少し寒い位である。あたりを見ると、はや二三人づつ四五箇所に潮を浴びて居たが、濱が廣いので、寥々として互に相顧るやうである。さて波はと

見ると、謂はゆる夏海の至極穩かなもので、それに「出し」と稱へるおとなしい風が、東南から海へ向けて吹くのであつたが、然しながら北溟の水の鼓盪たうし來たる餘勢は、また侮るべからざるものがあつて、どつとばかり大東たひに寄せて來る、従つて揉み立てる力もなかなか劇しい。余はざんぶと飛び込んで、少しばかり泳いで見たが、一間も出ると、すぐにずばと深くなるのに、其の大浪が四布蒲團ぶつんをかぶせる様に推して來るのであつた。しかのみならず鼻の先には長波うね／＼として、見ゆるものとは唯だ水光の天に接するばかり、丘の方は黄沙滿目鳥獸も跡を絶つといふ有様の、頗る寄るべ渚の感があるので、之れに處する未熟の水練者は、膽幾度か破れんとするのであつた。乃ち匆々身を回らして、脊の立つ處に來てほと息をつくると、油斷の背後うしろから、どんと一つ強いのに當てられる。何かは堪まらう、地藏ぢざう仆しにひつくりかへると、其のまゝずる／＼



と引きずられて、目の玉の飛び出さうな鹽辛い物を吞まされるといふ始末、さんぐの憂目に遭つて、這々の體で逃げ歸つた。

潮を浴びるのでは、かくの如く失敗したが、曉の砂を踏み、涼しき旭を拜し、壯なる潮を聽いて、夏の塵を洗ふといふ點に於いて、余は此の曉の雄大高渾なる光景を長く忘れることが出来ぬ。

佐渡に着いて相川に宿を取る。或る日の晚餐後、羽田の濱に出て見ると、恰も日の入際で、波を離るゝ凡そ一尺とも云ひたいあたり、さながら紅玉の大いなるを懸けたやうに輝いて居る。見來たれば、雲遠く潮平らかにして、茫茫たる日本海上に唯だ此の一團の輝く物のみなる眺望は、やゝ粗大にして味はひ少なき嫌ひはあるが、豪放なるに於いて、人の氣を旺んらしむるに於いて、自然の甚だ高きを感じしむるに於いて、尋常一様の夕映を見るの比では

なかつた。

それに此の濱の風景に自在なのは、この豪放なる大海の眺めを表にして、裏には別に、月雪の友たるべき一彎雋麗の汀を控へて居る點である。丸岡南陔は、カスガキ「幽岬」與トミサキ「富岬」、左右張鳥翅、中間半倚山、瓦屋魚鱗次、と歌つて居るが、まことに其の如く、濱の左に盡くるところは、西南に當たつて春日崎と斗出し、右に曲らんとしては、富崎、千疊敷、横島と散布し、而して下相川、羽田、下戸の町々が、其の間に列つて、東に鑛山を深く負ひ、淺きに倚りて人家の簇るを上町と稱へ、かくして、山と、上町と、下町と、濱と、海と、かう五段になつてゐて、しかも兩端が一筋に延び、或ひは危巖を起こし、或ひは斷磯を點じ、相川全景が好箇一帶の盆景を形づくつて、没變化の大海と對照してゐるのである。殊に此の景觀に風情を添へてゐるのは、濱砂利で、一帯玲瓏として、渚の踏む處皆白く、之れを拾へば箇々悉く玉である。し

或ひは危巖を起こし、或ひは斷磯を點じ、相川全景が好箇一帶の盆景を形づくつて、没變化の大海と對照してゐる。



かもそれが颯と來る浪に洗はる、傍らから、夕日の紅に染まつて、怪しき迄に麗はしと見れば、忽ち寄する浪の下に薄緑の色を成し、また顯はれてはいよく、白からんとするのである。かくして一波一波の寄する毎に、去る毎に、萬珠の争ひ輝く様は、畫にも言葉にも上すべからざるもので、眞に蓬萊が島の、珠を磯となすといふのもこれであらうと、目も放ち得ず恍惚として立ち盡くすのであつた。さてその石を取つて仔細に見ると、純白なるは石英質、渥丹なるは赤玉、淡紅又は黄なるは瑪瑙、紫なるは紫石英、金梨子地に輝くは銅鑛、黑白相錯はるは金鑛で、他にも名を知らぬ數々を含んで居るが、唯だ石英質のが最も多くあるために、白玉を敷いた様に見わたされるので、それが又くつきりと美しくも見えるのである。

余は此の表裏大小の變化に富んだ景色に見とれつゝ、日が落ち海が暗くなるまで此の濱を逍遙してゐたが、いつしか沖の彼方に

鳥賊船の火の五つ六つ涼しく點るのを見て宿に歸つた。(煙霞寮養)

二三 狂歌八首

荒木田守武  
足利末期の連歌師

伊勢の人  
天文十八年歿  
年七十七

四方赤良

江戸の俳人、狂歌師  
太田南畝又蜀山人と號す  
文政六年歿  
年七十五

天の戸を明けましてよい春。

虎に騎りかたわれ舟に乗れるとも

荒木田守武

人の口はにのるな世の中

四方赤良

改年の御慶めでたく天の戸を

明けましてよい春は來にけり

一つとり二つとりては焼いてくふ

鶉なくなる深草のさと



風來山人

江戸の奇人、錢

名家、作家

平賀源内

安永八年歿

年五十七

栗柯亭木端

大阪の狂歌師

眞宗の僧

安永二年歿

宿屋飯盛

江戸の國學者

石川雅望

六樹園とも號す

江戸の人

文政十三年歿

年七十八

馬場金埒

江戸の狂歌師

大阪屋甚兵衛

文化四年歿

風來山人

此の調子きいてくれねば三味線の

ちりてつとんとひいてしまふぞ

栗柯亭木端

世の中は何のへちまと思へども

ぶらりとしてはくらされもせず

宿屋飯盛

歌よみは下手こそよけれ天地の

動き出だしてたまるものかは

馬場金埒

雪ならばいくら酒手をねだられん

花のふぶきの志賀の山かご

唐衣橘洲

唐衣橘洲

江戸の狂歌師

小島泰從

享和二年歿

年七十

いづれまけいづれかつをと郭公

ともにはつねの高うきこゆる

### 二四 世界の行末 その一

行けどくいたらぬ空を慕ひても

のぼるや人のこゝろなるらむ

これは大西操山氏の歌であるが、人間の希望は限りのないものである。彼等は常に善美なるものに憧れる。而して一度之れを得ると、長く之れを續けたいといふ心になる。従つて之れをつゞける爲めに長く生きたいといふ心を起こすが、自然は壽命といふものを以て、容赦なく之れに制限を加へる。永く生きたいが、自然が許さぬ。此の矛盾を解く爲めに不老不死の方法問題が起こつ

大西操山

名は祝(はじめ)

哲學者

文學博士

早稻田大學教授

京都帝國大學教授

岡山市の人

明治三十三年歿

年三十七



て來るので、此の問題の起こるのは誠に自然である。けれども、古來嘗てこれに成功した者がない。

現代は人の知る通り、科學の非常に進歩した時代である。從來天然物に限られた物が、片端から人造される時代である。藍の如き、絹の如き、樟腦の如きはその著しき例で、金や銀や食物の人造も、もう空想ではない位になつてゐるが、唯だ一つ人間の壽命だけは、現代の學者もまだ如何ともすることが出來ずにある。

人間の不老不死が何故にさうむづかしいのであらうか。之れに對する答は極めて簡單で、それは要するに大自然の旨意に背くからである。大自然は物が同じ状態で永續することを忌んで、間斷なく變化させるやうに努めて居る。此の變化が我々人間の上には生、老、死の三態となつて現はれる。生れ、ば必ず年をとる。年をとればやがて死ぬ。此の變化は天地間に通じて行はるゝ、大

大自然は物が同じ状態で永續することを忌んで、間斷なく變化させるやうに努めて居る。

榮枯盛衰、新陳代謝、諸行無常。

盈つれば虧くる。

螻蛄隆車の譬どころではない。

滄海の一粟。

天地間の森羅萬象。

原則である。天地間にありとある者で、此の原則に支配されぬものはない。古人も此の原則には早くから氣がついて、榮枯盛衰、新陳代謝、諸行無常、盈つれば虧くるなどいふいろくの語を遺して居るが、これらは皆此の避くべからざる自然の大原則を言ひ表はした同義語に外ならぬ。造物主の眼から見れば、ほんの微塵同様の人間が、此の大自然の大原則に抵抗を試みた所で、効果のあらう筈がない。それは實に螻蛄隆車の譬どころではないのである。一體、人間の壽命は存外短いものである。時間は天が無窮である如くに無窮である。過去も無窮なれば、未來も亦無窮である。此の無窮なる時間に比べては、五十年や百年の人壽は、まことに滄海の一粟にも比することが出來ぬ。これは人の生命のみではない、天地間の森羅萬象悉く同じ事である。人は、生物は變化しても岩石、山川、海陸の如き無生のものは大した變化をしないと思ふで



あらうが、それは大いなる誤謬である。彼等の變化しないやうに見えるのは、見る人の壽命が短いからである。人一代で見えないものでも、數代、乃至數十代、數百代を経れば、明らかに見えて來るであらう。

先づ岩石について見ると、我が國には「さゞれ石が巖となる」といふ傳説もある。是は一方の眞理であるが、逆に又大巖塊がさゞれ石にもなるのである。岩石は堅牢に見えても、存外脆いもので、久しく空氣や雨露にさらされてみると、其等の中に含んでゐる酸素や炭酸に犯されて、次第にこはれて、礫にもなれば、土砂にもなる。莊嚴なる自然美の代表とされる、いかめしい、こゞしい岩山の附近に礫や土砂の見えるのは、皆岩石自身の製し出した自體のこはれ物に外ならぬ。

岩石がこの通りに變化するものならば、此の岩石が集まつて出

來てゐる山も、亦同様に變化するであらう。雨の降る都度山から泥水の流下するのは、雨水が山に出來た土砂を洗ひ流すからである。その結果として、山は徐々ながらも次第に低くなり、遂には平地同様の形となるべきは争はれぬことである。

山が次第に低くなるものとすれば、低い箇所のみを求めて流れてゐる川筋に變化の起こるのも亦當然の事である。海陸の變化することは、既に古人にも認められて、「桑田變じて海となる」といふ語がある。桑田が碧海となるならば、碧海が桑田となることもなくしてはならぬ。今日我々が眼前に見る海陸の分布は、現在に限られた分布で、過去には既に甚だしき相違があつた。將來に於いては、更に甚だしき相違があるであらう。

以上を争はれぬ眞理とすれば、我が地球の將來も略豫測することが出來る。地球のみひとり例外たることが出來ぬからである。

桑田變じて海となる。



生物滅亡の三原因。  
 一、生物の老死  
 二、水の消失  
 三、太陽の熱の減少

個體が老死する如くに、種も亦老死する。數多の種を合はせた屬も老死する。數多の屬を合はせた科、目も亦老死する。

遠い／＼將來の事は今から豫測されぬが、差當たり我々の豫言し得るのは生物の滅亡である。而して此の滅亡を來たす原因で、既に我々の氣附いてゐるものが三つある。一は生物その物の老死である。一は地球面の水の消失である。而して最後の一は太陽の熱の減少である。

## 二五 世界の行末 その二

いづれの種類の生物でも、その個體が老死する如くに、その個體を總べる一門一族、即ち生物學上でいふ種といふものも亦老死する。數多の種を合はせた屬も老死する。數多の屬を合はせた科、目といふやうな大部類も亦同じやうに老死する。

我々は前世界の生物を研究して、此の事實を確めることが出來

人間は諸動物の中、其の起源の最も新しいもので、今がその全盛期であるかのやうに思はれるが、是れも前の理から推すと、早晩衰滅するものと見る外はない。

た。生物の創生は漠たる太古に遡るので、今日からは年數さへ明らかでないが、數千萬年以前であることだけは確かである。此の長い年月の間に、生物は幾百回となく新陳代謝してゐる。古い時代のもの、今は全然消え失せてゐるものもある。比較的新しい時代に現はれたもので、將さに絶えんとしてゐるものも少なくな。象の如きはその一例で、今は印度と阿弗利加とに各一種づつを見るのみであるが、昔はその種類が數十に及んでゐたばかりでなく、今は全く跡を絶つた象類似の獸もゐた。人間は諸動物の中、其の起原の最も新しいもので、今がその全盛期であるかのやうに思はれるが、是れも前の理から推すと、早晩衰滅するものと見る外はない。もとより之れに取つて代はるものが現はれるではあらうけれども、取つて代はつたものも亦早晩衰滅するであらう。而して斯くの如く轉々と新陳交代する間に、遂には生物全體も亦滅



亡するものと見なければならぬ。またたとひ、生物が新陳代謝して、永久に存続するとしても、次ぎに述べるやうな天災が來襲すれば、必ず滅亡しなければならぬであらう。

それは何であるか。その一つは世界から水の失はれることである。

我が世界はその初め太陽のやうな火の球であつたと想像されてゐる。固より當時は、陸もなく海もなく、世界にありとある鑛物は、皆熱の爲めに氣體となり空中に飛散して、極めて混沌たる状態であつたが、年月が経つにつれて次第に冷却し、重いものが中心に集まつて、遂には表面に固體の皮までが出来るやうになつた。それから更に進んで空中に飛んでゐた軽い水蒸氣が凝集して水となつた。その後始めて生物が生れ出たと見做されて居る。我が世界がその昔非常に熱かつたことは、地の底が、少し下れば

地球の中心は地面から千六百里餘あるから、その内部の大部分は非常に熱いと見なければならぬ。

非常に熱いのも知られ、又火山から鎔けた岩石の流れ出るのも知られる。地の底の熱は、百尺毎に平均攝氏約一度づつ昇るのであるから、一里下れば約百三十度になる道理である。地球の中心は地面から千六百里餘あるから、その内部の大部分は非常に熱いと見なければならぬ。だから、我々は丁度焦熱地獄の上に生活してゐるやうなもので、火山の破裂や大地震の如きものも、その遠因はこゝにあると思へば、随分心細い次第である。

さて、現在水が地面の低い部分に溜つて、海となつて存在してゐるのは、取りも直さず地の底が熱いからである。地の底は、如何に堅い岩石の所でも澤山の龜裂がある。そして此の龜裂は皆水を含んでゐる。それは水が重力に従つて卑きにつくからである。ところが或る深さに達すると、その水が熱の爲めに水蒸氣に變じて再び上に昇つて來る。故に水は一定の深さ以下には入ること



を禁ぜられてゐるやうなものである。

地球の内部は此の通り非常に熱いものであるが、同時にこれも亦次第に冷えて行くものと見なければならぬ。それは前に挙げた大原則によるのである。冷ゆれば水の入り込む深さも次第に大きくなる。而して地面にある水は、或る時期に達すれば、皆地の底に吸ひ込まれてしまふことになるであらう。而して水なくして生物の生活し得ないことは言ふまでもない。

また我が世界に生物が産するのは、太陽の熱と光とによるのである。太陽の光線には白、黄、紅の三種がある。其の中熱の最も高いのが白で、次ぎが黄、その次ぎが紅である。夜間大空に輝く星は多く、此の三種の太陽であるが、太陽と云ひ、星と云ふも、實質は皆同一で、大小は單にその遠近によるのである。我が太陽は黄色を帯びて居るが、これはその昔白色であつたのが變はつたので、將來は

紅色になるものと見なければならぬ。紅色が一層冷ゆれば、無色無光になるであらう。さうなると、其の太陽は我々の眼には見えなくなるので、天空にはさういふ星が澤山あると想像されてゐる。太陽が紅色となり、次いで無色となるものならば、之れと共に、太陽が世界に與へる熱と光とは減じて行かなければならぬ。そしてそれが或る程度に達すれば、生物の維持されない事は自明の理である。

以上に述べた變化は皆量り知られぬ程の悠遠の未來に起こる事であるから、今日から之れを氣にして悲觀する必要はないであらう。また成りては壞れ、壞れては成るのが宇宙變遷の實相で、それが寧ろ一種の味はひでもあらう。とにかく斯様の臆測でも、もし道理のあるものならば、吾々は之れを正視して之れに善處する道を考ふべきである。

(横山又次郎の文による)

横山又次郎  
地質學者  
理學博士  
元東京帝國大學  
教授  
長崎縣の人



金田一京助

文學博士

アイヌ語學者

東京帝國大學助

教授

早稻田大學、國

學院大學の講師

盛岡の人

ユーカラ

アイヌ語詞曲

## 二六 アイヌ民族の純情

金田一京助

アイヌの民族的叙事詩は、天地開闢の古傳から、創業の祖神が鬼神を征服<sup>こと</sup>し、惡魔を平げた功業を謠つた宗教神話や、遠近の諸豪傑が遺した雄々しい英雄譚に至るまで、幾百篇と限りもなく多くあるが、其の中に、ユーカラと呼ばれる、半ば空想化され、藝術化されたトミサンベツ、シヌタプカの英雄兒が、孤兒の境涯から生ひ立つて、四隣の強敵を討ち靡け、國土第一の強者と謳はれる一代を謠つた花々しい物語の詩がある。それは幾多の標題の下に於いて様々の筋に物語られ、長いものは、幾篇かの長い戦物語から成立つて、秋の夜長を謠ひ明かして、やつと一曲を終はると云ふやうな雄篇をも生じてゐる。

物語詩は、アイヌに取つて單なる藝術ではなくして、神聖な歴史であり、經典であり、同時に部落の法典である。

かういふ大作になると、聴くものは無論深い感興に浸つて、一種の藝術境を爐邊に現出するのであるが、それにまた、アイヌの叙事詩が我々の所謂文藝と違ふ所は、アイヌでは、物語の内容が其のまま聞く者語る者の信仰の事實なることである。殊に神々の物語歌になると、其の全部が人々の生きた信仰で、それゆゑに、今日かうして祭るのだ、かうして尊ぶのだ、かうして祈るのだ、かうして守らねばならぬのだ、といふ風に、一々がそれごとく、信仰個條を形造るのである。

言ひ換へれば、それはアイヌに取つて單なる藝術ではなくして、神聖な歴史であり、經典であり、同時に部落の法典でもあるのである。それ故にこそ敬虔な心を以て一言一句



北海道アイヌ部落



も違はぬやうに傳承されるのである。懸命の努力の下に立派に記憶されて残つて來たのである。

此の「ユーカーラ」を私が始めて聞いたのは、日高の古老カネカトクの口からであつた。其の後、東京の上野に開かれた拓殖博覽會のアイヌ小屋に雇はれて來たコポアヌといふ紫雲古津の村の名門出のお婆さんから、再び此の詩を聞くことを得たが、そのコポアヌの話によつて、同じ紫雲古津にワカルバといふ盲目の老爺さんがゐて、「ユーカーラ」に通じてゐる事を知つた。そしてその老爺さんが平生口癖に「今の若い者は日本の事ばかり知りたがつて、「ユーカーラ」のやうなアイヌの古い話などをば知らうともしなくなつた。自分が死んだら沙流川下遊の傳説は、自分と一緒に亡びてしまふであらうが、誰れか文字のある人に逢つて、筆記でもして貰つて死にたい。」と云つてゐるが、「ユーカーラ」の中でも「虎杖丸の曲」と「蘆丸の曲」と

紫雲古津村  
北海道日高國沙  
流郡

ワカルバ  
紫雲古津村の酋  
長ウトムリウク  
の弟

の二つの秘曲を知つて居るのは、此の盲爺さんの外にはなからうといふ事を知つた。

私は久しくこの秘曲の名を聞いてゐるが、まだそれを耳にした



ワカルバ

ことがない。それに私は、どこかに残存する遺老を探して、今の中にそれを筆録して置かなければならぬと思つてゐたので、早速コポアヌを通ほして、私の意をワカルバに傳へた。そ

して大正二年の七月、コポアヌと共に此の盲ひたる老詩人を私の家に迎へることになつた。

ワカルバは紫雲古津の古老ウトムリウクの弟で、若い時は、膂力

若い時は、膂力



もあり、辯才も  
あり、鹿を逐ひ  
熊を搏とらにして曾  
て人後に落ち  
ず、加之、兄た  
ちにも越えた才  
幹を有つてゐ  
た。

とかく有り甲斐  
なしに取扱はれ  
つゝ、あぢきな  
い世をかこち暮  
らしてゐた。

もあり、辯才もあり、鹿を逐ひ、熊を搏とらにして曾て人後に落ちず、加之、兄たちにも越えた才幹を有つてゐて、立派な暮らしをしてゐたが、不幸にして中年から目を患ひ、妻のタウクノと、夫婦ながら盲目になり、縁邊を頼つて、有るか無きかの世を送る身の上とはなつた。併し盲目になつたが爲めに、天稟の強記が一層の力を加へて、エーカラの外に數多くの昔話を諳んじながら、新らしい世間から、とかく有り甲斐なしに取扱はれつゝ、あぢきない世をかこち暮らしてゐたが、そこへ思ひ設けぬ招きを受けたので、彼れは「おい、どんなもんだ。歸りには薩摩薯の一俵も、村の衆へ土産に持つて來てやらうぞ。」などと、喜び勇んで出京したのであつた。

ワカルバが半生の蘊蓄は、愈、叩けば愈、深く、私は一夏、朝起きるから夜寝るまで、一室に起臥して、根かぎりその傳承をローマ字で筆録した。それは「虎杖丸」、「蘆丸」の二曲の外、十四篇二萬行の叙事詩

これがこのアイ  
ヌのホメロスと  
の永久の別かれ  
にならうとは、  
神ならぬ身の知  
るよしもなかつ  
た。

と、短い神話の詩篇十曲とで、總計一千頁の「古事記」と「戦記物語」とが出来上がったが、惜しいかな事業半ばに、ワカルバ夫婦を扶養してゐた身寄が、一家をあげてチフスに罹つたといふ報し知ちが來た。そして醫藥の道のない部落の人々が、皆此の翁の祈禱にすがつて來るので、彼れは再來を約して八月の末に歸村したが、これがこのアイヌのホメロスとの永久の別かれにならうとは、神ならぬ身の知るよしもなかつたのである。

私がワカルバの長逝を知つたのは、年を越して翌春の年賀狀と一緒にあつた。其の後、も一つ年を越えて、大正四年の夏、私は樺太東岸の全アイヌ部落を巡訪しての歸るさ、秋に入つてから、日高へ廻つて、親しくこの紫雲古津に翁の亡き跡を訪うた。そこで、翁から噂に聞いてゐて、耳に親しい其の村の誰れ彼れに逢ふことが出



來、特に兄のウトムリウクや寡婦のタウクノ、遺子のコキ等には、涙と共に初對面の會釋をした。其の夜、内地で云へば、故人の三周忌、アイヌの所謂追善供養が、扶助者ウレシハツクの家で盛大に行はれた。

魂にしみ入るやうな哀話。

その晩の事である、私が圖らずも故人に關して魂にしみ入るやうな哀話を聞いたのは、祭祀の祈詞も式も全く濟んで、一座が酒宴に移り、和氣靄々として、男子達は上座に酒を酌み交はし、女子たちは下座で歌舞を始めて居る時であつた。爐端に私と對座してゐた隣の家の少しとぼけた青年が、ポツリ／＼と、誰れに云ふともなく、こんな事を語り出した。

「盲爺さんがよ。可笑しかつたな。東京は魚の貴い所だ。世話になつた旦那へ沙流川の生鮭の一本も送つて上げたら。」さう云つて、旦那に貰つて歸つたお金で、網を編む絲を買つて來てよ

川の水が切れるやうに冷つこい。

盲爺さん、手さぐりに、若い頃の手に覺えのある網すきに取りかかつたもんだ。盲人の一心で、到頭網を造り上げたてア！何十日掛つたけな。鮭が登る時分だから、川の水が、もう切れるやうに冷ツこい時、毎晩一時二時頃、眞暗な中を起きて、裏の沙流川へ下りて、腰きり漬つて鮭を追ひ廻してゐたてア。手さぐりで、青年は此處まで云つて、さも可笑しさうに、大口をあけてアツハツハと笑つた。

「可哀相によ、盲爺さん！せめて盲鮭の一匹も來て引掛かつて呉れ、ばい、のに……追ひ廻す方に目がなくて、逃げる方に目があるのだからな！どうしたつて取れつこが無いや。それでも懲りずにやつてたてア。皆に笑はれながらよ。到頭一匹も取りかねて、其の中に死んぢまつた。」

青年はさう云つて私の顔を見て、又から／＼と笑つた。私も釣

どうしたつて取れつこが無い。



ゆくり無く、此のうつけた青年の口からこぼれたからこそ。

り込まれて、笑つてしまつた。が、笑つては了つたけれど、眼からは涙が後から後からと出て、拭いても止まらなかつた。ゆくり無く、此のうつけた青年の口からこぼれたからこそ、これが私の耳に入つたのである。故人のこんな深い心盡くしを、遺族の人たちが誰れひとり、なぜ私に知らせてくれなかつたのであらうか。私は座を起つて、コポアヌや、タウクノなどの居る處へ行つて、その話をして、なぜそんなよい話を私に聞かしてくれなかつたのだ。と云つて詰ると、せめて一匹でも捕れて送れたら、話にもなるが、送つて上げもしない事を、かうしたあゝしたと云つたつて、旦那へ何のたしになる？」三人は聲を揃へて、さういふのであつた。そして新たに思ひ出したやうに、寡婦のタウクノは目を推し拭つてゐた。自分等の傳統的な生活を掻き亂されるのを避ける爲めに、魚利の磯濱は侵入者に委ねて、段々川添ひに退漸して來たこの人々は、

陰では有りつ丈の眞心を仕拂つて、知られぬ儘に埋もれて行く此の種の純情は、國土開拓の名の下に、昔からどんなに浪費されたことであらう。

いつでも、黙々として損を耐へてゐる人達である。陰ではありつ丈の眞心を仕拂つて、知られぬ儘に埋もれて行く此の種の純情は、國土開拓の名の下に、昔からどんなに浪費された事であらう。私はその後、半月餘りコポアヌの家泊まつて、老媪達の傳へてゐる神話や物語詩の筆録に沈潛した。そしてカバンの裡に收めたアイヌ神話の重いノートと、敗殘民族の純情に泣く重い心とを懷いて、歸京の途についた。

（『新青年』所載の文に據る）



島崎藤村

(前出)

小諸

長野縣北佐久郡  
の町 淺間山麓。

### 二七 千曲川旅情の歌

島崎藤村

小諸なる古城のほとり

雲白く遊子悲しむ。

緑なす藜藿は萌えず

若草も藉くによしなし。

しろがねの衾の岡邊

日に溶けて淡雪流る。

あたゝかき光はあれど

野に滿つる香も知らず、

淺くのみ春は霞みて

麥の色はつかに青し。

旅人の群はいくつか

畠中の道を急ぎぬ。

暮れ行けば淺間も見えず、

歌哀し佐久の草笛。

千曲川いざよふ波の

岸近き宿にのぼりつ。

濁り酒濁れる飲みて

草枕しばし慰む。

〔落梅集〕



# 二八 玉かつま抄

本居 宣長

本居宣長  
江戸時代の國學者  
賀茂真淵の門人  
伊勢松坂の人  
享和元年歿  
年七十二  
玉かつま  
本居宣長の隨筆集



本居宣長

近き世、學問の道開けて、大かたよろづのとりまかなひ、さとく賢くなりぬるから、とりとくに新なる説せつごしを出す人多く、その説よろしければ、世にもはやさるゝによりて、なべての學者、未だよくもとゝのはぬ程より、我劣らじと、よに異なる珍しき説を出して、人の耳を驚かす事、今の世の習なり。その中には隨分によろしき事も稀には出て來めれど、大かたいまだしき學者の、心はやりて言ひ出づる事は、たゞ、人にまさらむ勝たむの心にて、輕々しくまへしりへ

來めれど

なかくなる

をも考へ合さず、思ひよれるまゝにうち出づる故に、多くはなかなかなるいみじきひがごとのみなり。

かへさひ

すべて新たなる説を出すはいと大事なり。幾たびもかへさひ思ひて、よく確かなるよりどころをとらへ、いづくまでも行き通じて、たがふところなく、動くまじきにあらずば、出すまじきわざなり。その時には、うけばりてよしと思ふも、程經て後に今一たびよく思へば、なほわろかりけりと、我ながらだに思ひならるゝ、事の多きぞかし。

うけばり

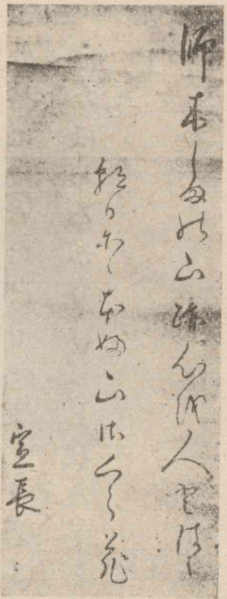
なほ  
我ながらだに

おふなく

すべてものを書くは、事の意こころを示さむとてなれば、おふなく文宇さだかにこそ書かまほしけれ。さるを、ひたすら筆の勢を見せむとのみしたるは、いかなる事とも讀みがたきが世に多かる、あぢ



きなきわざなり。常に書き交す消息しよき文などは、文字讀みがたくては言ひ遣るすぢ行き通らず、讀む人はた苦しみて、頭かたぶけつゝかへさひ讀めども、終に讀み得ずなどしては、こゝ讀みがたしと返



本居宣長筆蹟

し問はむも、さすがになめしきやうなれば、たゞおしはかりに心得ては事たがひもするぞかし。

ことわり  
心地ぞ、  
するや

よろづよりも手はよく書かまほしきわざなり。歌よみ、學問などする人は、殊に手あしくては、心劣りのせらるゝを、それ何かは苦しからむと言ふも、一わたりことわりはさる事ながら、なほあかずうちあはぬ心地ぞするや。

よさま

かいも

えせずなむ  
あるべくや

おのが師などのわろきことをいひあらはすは、いともかしこくはあれど、それもいはざれば、世の學者その説にまどひて、長くよきを知るごなし。師の説なりとして、わろきを知りながらいはず、つみかくして、よさまにつくろひをらむは、たゞ師をのみ尊みて、道をば思はざるなり。宣長は道を尊み古を思ひて、ひたぶるに道の明らかならむことを思ひ、古のことの明らかならむことをむねと思ふがゆゑに、わたくしに師を尊むことわりの缺けむことをば、えしも顧みざることあるを、なほわろしと譏らむ人は譏りてよ。それはせむかたなし。われは人に譏られじ、よき人にならむとて、道をまげ古の意をまげて、さてあるわざはえせずなむ。これすなはちわが師の心なれば、かへりては師を尊むにもあるべくや。そはいかにもあれ。



かなづみぞ

あらざるぞ  
か

われに従ひて物まなばむ輩も、わが後に又よき考のいできたらむには、かならずわが説にななづみぞ。わがあしきゆゑをいひて、よき考をひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道をあきらかにせむとなれば、とにもかくにも道をあきらかにせむぞ、われを用ふるにはありける。道を思はで、いたづらにわれを尊まむは、わが心にあらざるぞかし。

物まなぶともがら、物知り人にあひて物問ふに、ともすれば、まづ古書いにしへの中にも、よに難きこととして、誰も説き得ぬふしをえり出て問ふならひなり。難きことをまづ明らめまほしく思ふも學者のなべての心なれども、然らば易きことどもは皆よく明らめ知れるかと試むれば、いと易きことどもをだにいまだえよくもわきまへず。さるものさしこえてまづ難きふしを明らめむとするは、

聞え

問ひも、明らめ

同じき

みながら

いとあぢきなきわざなり。よく聞えたりと思ひて、心もとゞめぬに、思の外なるひが心得の多かるものなれば、まづたやすき事を幾度もかへさひ考へ、問ひも明らめて、よく得たらむ後にこそ、難きふしをば思ひかくべきわざなれ。

書をうつすに、同じくだりのうち、あるは並べるくだりなどに、同じき詞のあるときは、見まがへて、そのあひだなる詞どもをうつし洩らすこと、常によくあるわざなり。又一ひらと思ひて、二ひら重ねてかへしては、そのあひだ一ひらを、みながら落すこともあり。これらつねに心すべきわざなり。又よく似て、見まがへ易き文字などは、ことにまがふまじく、たしかに書くべきなり。これは寫しがきのみにもあらず、おほかた物書くに心得べき事ぞ。



須賀直見  
伊勢松坂の人  
宣長の門人

譬なりかし

まじり

匂…香

須賀直見がいひしは、廣く大きな書を讀むは、長き旅路を行くが如し。おもしろからぬ處も多かるを、經行きては又面白く目覺むる心地する浦山にも到るなり。又、足強き人は早く、弱き人は行くこと遅きも、よく似たり。」とぞいひける。をかしき譬なりかし。

花は櫻。櫻は、山櫻の葉青く照りて細きがまばらにまじりて、花しげく咲きたるは、亦たぐふべき物もなく、うき世のものとも思はず。葉青くて花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大かた山櫻といふ中にも、品々のありて、細かに見れば、一本ごとにいさゝか變れるところありて、まったく同じきはなきやうなり。すべて、曇れる日の空に見あげたるは、花の色あざやかならず。松などの青やかに繁りたるこなたに咲けるは、殊に色はえて見ゆ。空清く晴れたる日、日影のさす方より見たるは、匂こよなくて、同じ色とも覺

えぬまでなん。朝日はさらなり、夕ばえも。

### 二九 本居翁の遺蹟

芳賀 矢一

薄寒い朝風に面を吹かせながら、野山の景色を眺めゆく樂しさ。見わたせば早稻田はすでに刈り盡くされたが、晚稻田は金色に波立つて、美しく豊年の喜びを見せて居る。尾花や野菊の交つてゐる疎らな小松原を通つて、しばらく行くと、喬松の亭々と聳えた山の麓にさしかゝつた。それから、あの山は何、この山は何と、車夫の語るのを聞きながら進むうちに、あれ、あそこの山の茂みが御墓で御座ります。」と、俄に車夫の詞が改まつて、間もなく山室山の麓に着いた。

芳賀矢一  
國文學者  
文學博士  
東京帝國大學名譽教授  
昭和二年  
年六十一

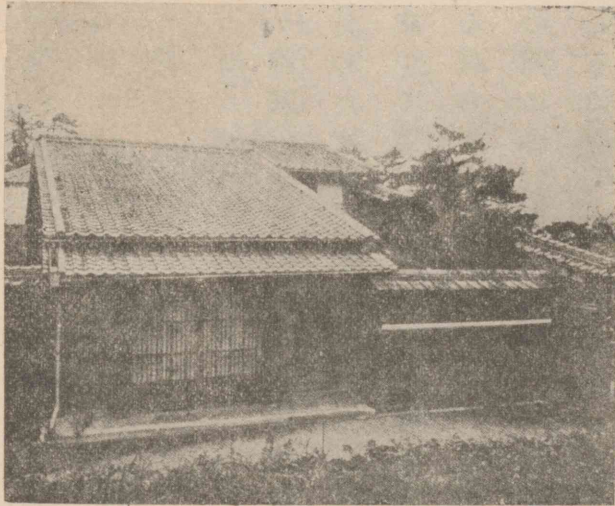
尾花や野菊の交つてゐる疎らな小松原を通つてしばらく行くと喬松の亭々と聳えた山の麓にさしかゝつた。

山室山  
三重縣飯南郡花岡村。



翠の滴るやうな木々の茂り、その間を流れる溪流の音、都に慣れた目や耳にはいかにも清らかで珍しい。

九十九折を喘ぎ喘ぎ上る。



本居宣長舊宅

車を捨て、爪先上がり坂道を上つて行く。翠の滴るやうな木々の茂り、その間を流れる溪流の音、都に慣れた目や耳にはいかにも清らかで珍しい。その杉、松、椎などが茂り合つた小暗い道を凡そ四五町も上つた處に、浄土宗の寺がある。妙樂寺といつて、翁には特に深い関係のある寺である。それから右へ左へと、九十九折を喘ぎく、六七町も上ると、古い木の鳥居が立つてゐて、十數段の石磴の上に、二三十坪ばかりの平地がある。その中央の小高い盛土が即ち翁の墓である。

平田篤胤  
國學者  
宣長の門人  
秋田の人  
天保十四年歿  
年六十八

上には櫻の木が一本植ゑられて、その前に「本居宣長之奥墓」

と題した墓石が建つて居る。墓の左手には圓い石が一基、平田篤胤大人の

なきがらはいづくの土になりぬとも

魂はおきなへの許に行かなんと刻んだのが立つて居る。

篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に教へを受けられたことはなかつたが、翁の歿後、數多の門弟子のある中で、大人ひとり翁の傍らに侍つて居られるのは、さぞかし満足なことであらう。この墓所は、もとの妙樂寺の所有地であつたのを、翁が懇請して、生前に占定して置かれたのである。翁がその承諾を喜んで、住僧に宛てられた禮狀は、今もなほ同寺に珍藏してあるが、



山室の山に千年のやどしめて

かぜに知られぬ花をこそ見め

といふ翁の歌は、この時の悦びを述べられたのであつた。二十年來一日として翁の書物を讀まぬことのない後進の一書生が、今始めて翁の墓前に額づいて、感慨は眞に無量である。

もゝとせの世は隔

つれど教へ子に數

まへませとをがみ

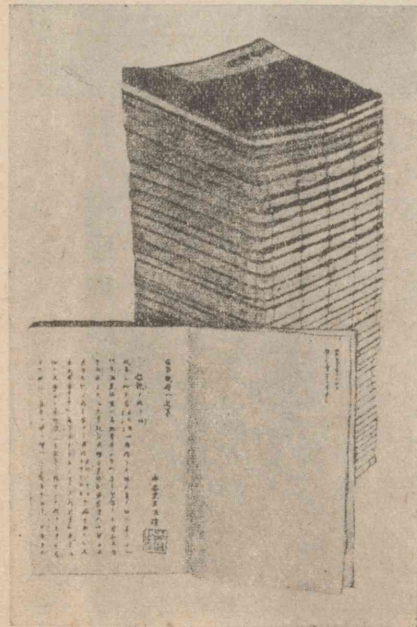
額づく

翁が歿後の門人は、幾

百萬の多きに上つてゐ

るであらう。そしてそ

の著書の卓絶した學術上の價值と、偉大な感化力とは、未來永劫に



本原冊四十四傳記事古著長宜

その著書の卓絶した學術上の價值と、偉大な感化力。

世に學者の事業ほど偉大なものはない。

歿後の門人を作りつゝある。世に學者の事業ほど偉大なものはない。

この墓所は山の頂きにあつて、眺望の美しさは比類がない。近くは松坂の町を眼下に見て、遠くは青々とした伊勢の海から志摩、三河、尾張等の崎々、山々を見はるかし、のみならず遙か彼方には富士も見えるといふことで、

「晴れには丁度あのあたりに。」

と、案内の人が指さして教へてくれた。千古に卓越した偉大な學者の奥城としては、誠にふさはしい場所である。

妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅を拜して、參拜名簿に名を記した。こゝの眺望もまた誠に美しい。此の寺は元來翁の祖先の檀那寺で、翁が折々遊びに來られる中に、深き好みを寄せられるやうになつたといふことである。

千古に卓越した偉大な學者。



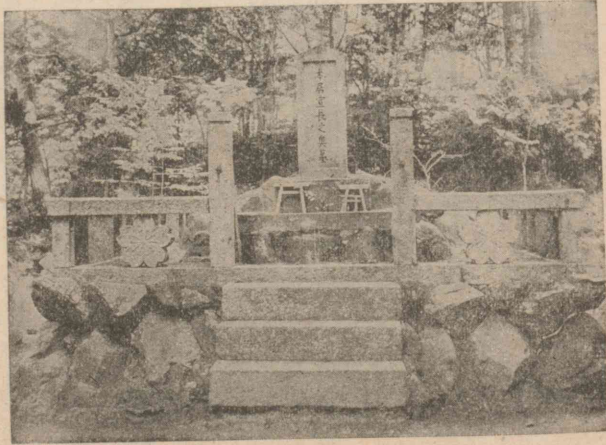
そゞろに人をして襟を正さしめる。

松坂へ歸つて、城址の公園に行つた。こゝに鈴屋遺蹟保存會があつて、翁の舊宅がそのまゝに保存されて居る。又新しい倉庫には、翁が自筆の草稿、遺愛の品々、醫業用の藥箱なども陳列されてゐる。どの稿本も丁寧に綺麗に認めてあつて、翁が四十餘年の勤勉篤學はそゞろに人をして襟を正さしめる。舊宅はもと魚町にあつたのを、市中では火災の虞れがあるといふところから、保存會の計らひで、この舊城址の一角に移したのであつた。場所は變はつたが、家や屋敷はもとより、庭の樹木、置石の取合はせまで、悉く舊態を存する様に苦心したといふことで、臺所の竈も、井戸も、便所も、すべてが、翁在世の折のそのまゝになつてゐるのである。さて、下が抽出になつてゐる例の小さい階段を上ると、二階が四疊半の書齋で、その床の柱に三十六の鈴が六つづつ六段につながれて懸かつて居る。但しこれは模造品で、實物は陳列庫に藏められてあるが、

この四疊半から日本全國を吹き靡かした古學の風が舞ひ起こつた。

ワイマール  
ドイツの一都會  
ゲーテ  
(1749-1823)  
ドイツの詩人  
シルレル  
(1754-1865)  
ドイツの文學者

これが即ち翁の一切の著書の述作せられた所で、この四疊半から日本全國を吹き靡かした古學の風が舞ひ起こつたのである。窓は西向についてゐて、それからさしこむ夕日は、さぞ堪へ難かつたであらうと思はれるが、この質素な家居の様が、いよゝゝ翁の人格を大ならしめてゐる。私はドイツのワイマールで、ゲーテやシルレルの舊宅を見た時にも、その偉大な事業と、その質朴な家居の状態との對比を面白く感じたが、この鈴屋の遺蹟に對しては、一層その思ひを深うした。またゲーテ、シルレルの舊宅を見た時には、日本でもかういふ風に、偉



本居宣長の墓



人の遺蹟を保存したいものだと思つたが、今やそれが目のあたり  
實行されるやうになつて、まづこれを翁の舊宅に見ることを得た  
のは實に悦ばしいことである。

この公園は四望豁然恰もパノラマを見るやうで、もとより絶景  
ではあるが、翁の遺蹟を移して更に崇高なる威嚴を加へた趣があ  
る。我が國に翁のあるのは、我が國の誇りである。また松坂町民  
の誇りとして、翁の遺蹟に越したものはない。

城の大手門を出でて數十歩、縣社山室山神社がある。翁を祭つ  
た社で、社殿、瑞籬が神宮風の様式であるのは、一入うれしかつた。  
小春日和の麗かさに、このあたりの櫻の木が幾本となく返り咲き  
して居るのを見るのは、殊にうれしかつた。

さくら木にゑりし百千の卷々ぞ  
風に知られぬ花にはありける。

大西祝

哲學者  
文學博士  
早稻田大學教授  
京都帝國大學教  
授  
岡山市の人  
明治三十三年癸  
卯三月十七

各國歴史の河流  
は世界歴史とい  
ふ一大海に朝宗  
す。

ユダヤ人は地上  
に神の王國を建  
つるを以てその  
覺悟とし、ギリ  
シヤ人は文藝學  
術を傳播するを  
以てその天職と  
し、ローマは世  
界の帝王を以て  
自ら任じたり。

### 三〇 國民の覺悟

大西祝

世界の文明はこれを全體より觀察すれば、年を逐うて進歩し發  
展す。而して各國歴史の河流は遲速の別こそあれ、遂には世界歴  
史といふ一大海に朝宗する運命を有するなり。たゞその世界の  
文明に力を致すに於いて、各國必ずしもその趣を一にせず。往昔  
ユダヤ人は地上に神の王國を建つるを以てその覺悟とし、ギリシ  
ヤ人は文藝學術を傳播するを以てその天職とせり。ローマは世  
界の帝王を以て自ら任じ、蠻夷の襲撃を受くる曉に於いても、なほ  
世界の帝王たる地位を保ち、遂に政權を剝奪せらるゝに及んでは、  
法王政を建て、精神的帝王となり、以て世界に君臨したり。  
近世の歐米人を見るに、英人は己が運命は海上權を掌握して、遠



隔の地に植民をなすにありと信じ、米人はその國土を以て有らゆる方面に自主自由を發達せしむる舞臺となし、佛人は人間的の思想感情を世界に弘むるを以てその抱負とするが如し。

日本は世界の文明に對していかなる寄與をなすべきか。日本國民は世界に對していかなる抱負を有すべきか。これ今日の識者先覺が深思熟慮すべき一大問題たり。世界の大勢は日本人をしていかなる事を世界に宣傳せしめんとするか。大勢は無聲無形なり。識者先覺は大勢を悟了し、これをして聲あらしめ形あらしめざるべからず。若し偉大なる先覺ありて、この大勢が言はんと欲して言ふ能はざるところを國民に宣傳するあらんか。國民の心は、譬へば堰



大西 祝

日本は世界の文明に對していかなる寄與をなすべきか。日本國民は世界に對していかなる抱負を有すべきか。これ今日の識者先覺が深思熟慮すべき一大問題たり。世界の大勢は日本人をしていかなる事を世界に宣傳せしめんとするか。

かれたる水の堰を開かれたるが如く、滔々たる勢を以て、その進むべきところに流れ行かん。我輩は一日千秋の思ひをなして、日本國民將來の覺悟抱負を宣傳する大指導者の出でんことを希望して已む能はざるなり。

しかれども、我輩姑らく明治維新時代に立ち返り、當時の經世憂國の士が自ら任じたるところを見る時は、その中になほ我が國民が今日の覺悟として可なるものあるを發見せずんばあらず。彼等は、大義名分を四海に布くを以て日本の抱負とし、權謀術數を去り至誠世界に立つを以て日本の覺悟とし、一視同仁天地の大道を體し、天に代はりて世界の横道を説破し、討伐し、勦誅し、萬國安全の道を示すを以て日本の天職と考へたるなり。その元氣の壯なる、人をして覺えず奮起せしむるものあり。此の元氣と此の覺悟とありしが故に、維新の改革は成就して、鎖港攘夷の陋見は打破せ



世界に於いて、大義名分のため、に熱狂し、忠誠のため、一身を抛つこと土芥も管ならざる國民ありとせば、何人もまづ指を日本國民に屈せざるを得ざるべし。

日本が世界の文明に對して寄與すべき最大なる

られたるなり、維新以來日本が駸々として進歩し、今日の如く力量を有する國となりしは、實にこの元氣と覺悟とのありしが故なり。我輩は日本人に種々の缺點あるを知る。日本人はなほ幾分かの修練と困難とを経過せざれば、決して大國民となる能はざるを知る。しかれども、世界に於いて、大義名分のために熱狂し、忠誠のために一身を抛つこと土芥も管ならざる國民ありとせば、何人もまづ指を日本國民に屈せざるを得ざるべし。至誠の極、或は輕卒の舉動に出で大事を誤る同胞なきを必せずと雖も、身を殺して仁を成すに於いて、極めて敏速に、死して悔いなきこと、日本人の如きは、世界國民中多くあらざる所なり。日本人は道德義務の念に沸騰する國民なりといふとも、誰れか然らずといふものあらん。果たして然らば、日本が世界の文明に對して寄與すべき最大なるものは、道德上の教訓にはあらざるか。日本は道德上に於いて

ものは、道德上の教訓にはあらざるか。

世界の師表となり、世界より私慾の氾濫を排除する一大任務を有し居るにはあらざるか。日本が開闢以來絶海に孤立し、世界の腐敗の外に超越し、清潔美麗なる風土山川に薰化せられ、君臣父子夫婦朋友の道正しく、大體より見て、殆んど理想的國家を經營し來りたるもの、他日大いに世界の腐敗を掃蕩するがためにはあらざるか。天下の微弱を扶持誘掖し、驕傲無禮を掣肘壓倒し、世界の私心を根絶し、道德上の帝王となりて世界に君臨するは、日本が其の特質上より世界の文明に對してなすべき最大寄與にはあらざるか。我輩は日本が天地大道の化身となりて、世界萬國を警醒する大覺悟をなすべき時機の到來せるを見て、欣喜措く能はざるなり。



# 純正國語讀本卷六終

(略名) 早圖五十嵐國語

昭和十二年七月廿五日初版印刷  
 昭和十三年一月二十日訂正再版印刷  
 昭和十三年八月十五日訂正再版印刷  
 昭和十六年八月廿五日訂正三版發行

純正國語讀本改訂版  
 各卷定價金六十錢

著者 五十嵐 力

發行所 東京市麴町區飯田町二丁目二十番地  
 中等學校教科書株式會社  
 代表者 山本慶治

印刷所 (東京) 東京市牛込區榎町七番地  
 大日本印刷株式會社  
 印刷者 五十嵐良晃



發行所

東京市麴町區飯田町二丁目二十番地  
 中等學校教科書株式會社  
 日本出版文化協會會員番號一二七五二二

配給元 日本出版配給株式會社  
 東京市神田區淡路町二ノ九



留  
韓  
以

廣

廣島縣立世羅中學校

正分亭

廣島縣立世羅中學校

廣島縣立世羅中學校

廣島縣立世羅中學校





広島大学図書

2000301605

